

漆黒の獵犬、静寂の摩天楼

エセダンディズム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幽霊は見えないけど快樂主義者のちよつとヤバい（オブライト）ウマ娘、マンハツタンカフェが、理解のある大好きなトレピ君を手に入れて幸せになるお話。

史実、アプリシナリオをベースにしつつオリジナル展開で進めていきます。

競馬は素人なので、調べながら自分なりの解釈で書いています。ご了承ください。

目次

序章	マンハッタンカフェとの出会い	
第1話	stalking hound	1
第2話	貴方の隣に這寄る影	11
第3話	宣戦布告	22
第4話	噂のコンビ	30
第5話	集い始める世代	38
第6話	不思議の国のアリス	46
第一章	ジュニア級	
第7話	メイクデビュー	59
第8話	誰が為に	69
第9話	光明	86
第10話	変人記者	98
第11話	休日的一幕	104
第12話	聖蹄祭、あるいは霸王のオペレッタ	119

序章 マンハッタンカフェとの出会い

第1話 stalking hound

ここ最近、誰かに見られているような気がしている。

自覚したのは二か月ほど前。自分がトレセン学園にトレーナーとして採用されて、一週間くらい経ったころだったと思う。

初めは、新人トレーナーへの物珍しさや観察だと思っていた。

しかし、人気のない夜道やトレーナー室の中でも背中に視線をはつきり感じるのは、果たして正常なことなのだろうか。

もちろん、自分の勘違いの可能性は否めない。

そもそも、新人トレーナーの自分が誰かにそんな付け回されることに心当たり自体ないのだから。

今のところ、感じるのはただ視線だけだ。

目に見える危害や異変はないし、このまま様子見をすべきか、学園に一度報告すべきか、悩んでいた。

「はぁ……………」

いけないいけない、生活環境が大きく変わって、メンタルが少し弱っているのかもしれない。

視線も、そういった心の弱さが作った幻覚だとすれば、気にすれば気にするほどドツボにハマる、という奴だろう。

ズズ……………。

気持ちを落ち着けようと、まだ湯気の立っているコーヒーを口にする。

「フウ……………」

疲れた心に温かいコーヒーが染み渡る。心地の良い芳香が鼻腔をくすぐる。
美味しい。

1秒・・・・・・・・5秒・・・・・・・・1分・・・・・・・・。

異変は、ない。

「やっ」

コーヒー豆も、抽出器具も、そもそも食器もないこのトレーナー室で、この淹れたてのコーヒーは、一体誰が用意したもののだろうか。

「やっぱり視線、幻覚じゃなかったかあー・・・・・・・・」

身体からどっと力が抜け、背もたれに倒れ込む。

得体の知れない恐怖が一周回って、落ち着いた感すらある。妄想やオカルト的なものではなく、実在する誰かの手によるものなら、まだ対処のしようもあるだろう。

鍵のかかった部屋に誰か入り込んでいるという事実自体が問題といえれば問題だが、しかし、何か物色された形跡もないし目的が不明だ。

「俺をストーキング・・・・・・・・？ いや、ないな。どんな物好きだよ。多分別の目的があるんだろう」

本当ならすぐ学園側にこのことを報告するべきなんだろうけど、間が悪いことに明日は『選抜レース』。

いらぬ騒ぎでウマ娘たちに迷惑をかけたくはない。

しかし、本当に何者なんだろう。手がかりの一つでもないものだろうか。

そう思って周囲を見渡すと、机の上、コーヒーカップの置いてあったソーサーの端から、何か白い紙の端がのぞいていることに気が付

く。

ソーサーを避けると、そこには折りたたまれた一枚の紙。カップを置いてそれを広げてみる。

「私を見て」

ゾワツ

「何も見てない！俺は何も見てないぞ！さあ、明日のスカウトに向けて準備準備！」

紙を見なかったことにして、カラ元気を振り絞りながら心に誓う。

（明日、選抜レースが終わったら理事長室に駆け込もう……）

◇

年に4度、『本格化』を迎えたウマ娘たちが、己の描く夢への第一歩を踏み出すため駆け抜ける、トレセン学園名物『選抜レース』。

天気は晴れ、バ場は良。環境に恵まれ絶好のレース日和だ。

日程も順調に進行し、見事結果を出したウマ娘や結果は惜しくとも光るものを見せたウマ娘のところには、スカウトをしようと次々にトレーナーたちが声をかけていく。

一人も担当のいない自分も、担当を見つけなければという義務感から積極的に声をかけてはいるのだが、目を付けた子に声をかけようとしたら別のトレーナーに先んじられたり、実績のなさを理由に振られたりと、結果が振るわないままとうとう最終レースまで来てしまった。

何かと面倒を見てくれる先輩がチームのサブトレーナーやってみないか、と声をかけてくれているし、その方がいいのだろうか。

やはり研鑽と実績を積んだ上で成長してからじゃないと新人の自分には担当ウマ娘もできないのかな、と若干ネガティブになりながら最終レースの準備を見守る。

『5番——さん……6番マンハッタンカフェさん……7番——』

マンハッタンカフェ。続々とゲートに入っていく中で、一人立ち振る舞いに緊張が全く見られないため目に留まった。

他の子は気負っていたり落ち着かない様子を見せる中であの落ち着きぶり。

レースにおいて大事な精神面では既に他の子に一步リードといったところだろうか。

「マンハッタンカフェ……ああ、あの女優をやってるっていう」

「撮影のために欠席も多いらしいわね。メンタルは鍛えられてるみたいだけど、練習不足は精神じゃ補えないわよ」

「よく言えば落ち着いてるが悪く言えばレースに思い入れがそんなにないんじゃないか？ 1番のウマ娘みたいにデビューにかける熱意みたいなものも見えないし、レースは腰掛程度に考えているのかもしれない」

そんな口さがないトレーナーたちの会話が後ろから聞こえる。

別に彼女の事に詳しいわけでもないが、頑張っているウマ娘がそこまで悪し様に言われる筋合いもないだろうと怒りを覚える。

だが、ここで騒ぎを起こすわけにもいかないし何よりもうすぐレースが始まる。

喉元まで上がってきた反論を飲み込み、マンハッタンカフェに肩入れして応援しようと心に決め、出走を待つ。

「——っ」

「んっ」

ふと、マンハッタンカフェと目が合った気がした。

たまたま偶然、こちらを見ただけだろう。

しかしなぜか視線はこちらに固定されたまま止まり、大きく見開かれたその金色の瞳が、じつとこちらを見ている気がして、思わず小さく手を振ってみる。

たぶんこっちに仲のいい友人がいてそれを見てるとかだと思っし、勘違いしている人みたいで恥ずかしい限りだが、観戦しているトレーナーがウマ娘を応援しているだけだしそこまで変ではないはず……。

『さあ、各ウマ娘全員ゲートに収まりました……。トレセン学園選抜レース最終組、まもなく出走です』

ガシヤコン

『——スタートしました！ あつ、マンハッタンカフェ、マンハッタンカフェ出遅れた！』

直前まで目線がこちらに向いていたからだろうか。他のウマ娘が一斉に好スタートを切る中、マンハッタンカフェ一人出遅れてしまった。

（まさか俺のせいかな？ いや、知り合いでもない自分が手を振ったくらいで出遅れるくらい集中力を乱すかな？ ……そんなに気持ち悪かった、とか？ どうしよう……。）

「はあ、まさか出遅れるなんてね」

「心ここにあらずか、こりやダメだな」

（くっ、頑張れマンハッタンカフェ……！）

手を握りしめ彼女の走りを見つめる。

晴れ舞台でこの失態。流石の彼女も気持ちは完全に焦っているはずだ。

それなのに、なぜだろう。

風になびく黒い長髪が、やけに弾んでいるように見えた。



『先頭逃げる逃げるハピネスポピー！　しかし第3コーナーを回ったところで、苦しいか！　ここまでか！　後ろから迫る混戦の先行バ集団が襲い掛かる！』

先方に追い付けず垂れてくるウマ娘をかわしながら、内へ、内へ、影に隠れるように位置取りジワジワと進出する。

逃げを取ったウマ娘は既に尾を掴まれ、団子になった先行集団に飲み込まれてしまったようだ。

『レースは大混戦！　四人のウマ娘がもつれ合いながら一步も引かないデッドヒート！　この分厚い壁を前に、中団以降のウマ娘たちはどう出るのか！』

勝負ここから第4コーナーまでに、あの集団から誰が抜け出すか、観客は皆そんな風に考えているだろう。

後ろは時すでに遅く、今から外に回ってこの集団をかわそうものなら、タイムロス・距離負担増大の両方に押しつぶされるから。

それは正しい。
ではどうするか。

『第4コーナーに差し掛かろうかというところ！　おおっと、ここでマンハッタンカフェ！　最後方からいつの間にかマンハッタンカフェが上がつてきていた！　が、抜けない！　大きく横に広がった先行集団に阻まれる！』

壁？　この隙間だらけの集団が？

別に彼女たちは誰かをマークやブロックしようとしているわけでもない。

ただ、自分が一步でも前に出ようとして、それが団栗の背比べと違って結果として膠着状態を形成してしまっているだけだ。

風が吹けば飛ぶようなバランスの上に成り立った天秤に、後ろから

私という石を放り込めば、天秤は傾き、そして崩れる。

かわせないなら、抉って食い破れ。

猟犬は逃げる獲物の群れを壁などと考えない。追いつけばそこから先に待つのは、壁の踏破ではなく蹂躪だ。

私とトレーナーさんの記念日となるべきこのレース。門出に掲げる祝杯を満たす、深紅のワインを準備しましょう。

そして、なみなみと浴びるように飲み干して、顔を赤く染める火照りを、熱情を、恋慕を、酒精のもたらす酔いにて全て包み隠そう。

収穫を待ち、熟れた葡萄は全て眼前に。

貴方たちから滴るワインが染め上げる血路こそ、私たちの進むべき楽園へのレッドカーペット。

さあ、

「――狩りを始めましょう」

『おおっと！ 3番イエローピースここまでか！ ペースが落ち……間にスリりと身体を差込むマンハッタンカフェ！』

（わかっていましたよ。このレースのペース、四人のうち貴方だけには少し早すぎたんですね。張り詰めた糸に私という得体の知れないプレッシャーに気を取られ、そして安心しようと後ろを確認してしまっただけ）

人は、認識こそ安心だと思いつく。

しかし、認識すればこそ生じる恐怖もあるのだ。そして、恐怖で思考にノイズが走り、足は一瞬ではあるが硬直し、薄氷を成り立たせていた前提が崩れ去る。

そうすればもう、彼女はただ首を牙の前に差し出したも同然。

なぜ、どうして

すれ違いざまに向けられた視線、背中にたたきつけられる感情が私

を昂らせる。

そうだ、この瞬間こそ、私がレースのゴールよりも望むもの！

どす黒く、甘美で、醜悪で、淫靡なこの快楽を、もっと味合わせてください！

さあ！ さあ！ さあ！

『並んだ！ 並んだ！ 並んだまま——いや、マンハッタンカフェ強い！ 先行集団のわずかな隙を見逃さず、そのまま差し切って一気に飛び出した！』

『背中を見せつけるマンハッタンカフェ！ 後続も追いつがるが、衰えない末脚を見せつける！ ゴール！ スタートこそ出遅れましたが、強さを見せましたマンハッタンカフェ！』

ゴールを超えて、感じるのは達成感ではなく物足りなさ。

ああ、このレースではこの程度か……。

一瞬で胸の奥から熱が消える。

代わりに満ちるのは虚しさか。

(ですが、まあいいでしょう)

所詮は選抜レース。自分を含め、デビューすらまだのウマ娘しかないレースに期待するものはない。

『トウインクル・シリーズ』

選ばれたウマ娘が集うあの場所にこそ、私の求めるものがある。

今日のレースはその道のりの一歩目、前菜ですらないのだから。

(ですから)

客席を見上げ、一点を見つめる。

そこには、まるで我がことのように喜びながら私を見つめる愛しい人の顔があった。

ああ、堪らない。何て素敵な光景だろう。

これから先、何度もこの光景を再現し続けたい。

クラシックで、シニアで、何度でも貴方に栄冠を捧げましょう。だからどうか、その瞳を私から外さないでいて。

「今日からが始まりですよ、トレーナーさん。ふふ……ふふふふ」

「!? か、カフェさん怖っ」

「健闘を称え合いたかったけど話しかけるのやめときましよう。……不気味だわあの人」

「ふふふふふふふふ」

第2話 貴方の隣に這寄る影

「すごい……すごい！」

デビュー前にもかかわらず、レースの流れを読んでいるかのような走り、柔らかかでのしやかなフォーム、影のようにとらえどころのない差し脚。

彼女は出遅れという不利を抱えながら、選抜レースを自分だけの舞台にして見せた。

(スカウトしたい……！)

彼女となら、彼女とだったら、トウインクル・シリーズで素晴らしいレースをできる！

そして何より、他のウマ娘の走りには感じなかった言葉では例えようもない感覚が、全身を駆け巡る。

何なんだろうこの気持ちは。

たった一レース、それを見ただけで俺の心の中で、『マンハッタンカフェ』という存在が大きくなっている。

才能を見せつけたウマ娘は今日のレースに他にもいた。それなのに、その誰よりも彼女の走りに強く心を引き付けられている。

今すぐスカウトに！

しかし、そう思ったのは自分だけではなかったのだろう。

コースには既に、マンハッタンカフェを囲むように人だかりができていた。

(くそっ、走りに見惚れてボーっとしすぎて出遅れた！)

「マンハッタンカフェ！ 君をスカウトしたい！ 君ならGIだって夢じゃない！」

「私なら貴方に合った最高のトレーニングを用意できるわ！」

「女優のキャリアに走りの才能、君にはスターの素質がある！」

「いえ、あの……」

並びたてられる美辞麗句。確かに、彼女にはそれくらいの魅力がある。

よくよく見れば、先ほど自分の後ろで色々彼女に失礼なことを言っ

ていたトレーナーたちすら、その集団を形成していた。

現金だなあ……。

しかしどうしたものか。彼女を囲うトレーナー陣はぱつと見渡すだけでも、G I ウマ娘を育成した実績を持つベテランや、上り調子のチームを指導するトレーナーなど選り取り見取りだ。

完全に出遅れ、しかも誇れるものも示せるものもない、あるとすれば熱意くらいの新人の自分では話すら聞いてもらえないかもしれない。

『何勝手に新人風情が盛り上がっているのか』

『お前にそんな権利はない』

『身の程をわきまえろ』

そう、冷水をかけられたような錯覚がした。

近づこうとしても、人の圧に近寄れないし、一度離れてみて、もし人が減ったところで誰もスカウトに成功していなかったら、その時に声をかけてみよう……。

一日スカウトが失敗続きで思考が後ろ向きになっている自覚はあるが、粘っても今できることはない。

顔を洗って気を引き締める意味でも、少しこの場から離れよう。

マンハッタンカフェを中心に盛り上がる輪に背を向け、トレーニングコースを後にする。

その時、こここのところいつも背中に感じる、視線が突き刺さるような感覚がした。

「!？」

振り向くが、マンハッタンカフェスカウト集団以外に目立つ人はおらず、こちらを見つめるような人もいない。

「気のせいかな？」

なおも背中に視線が刺さる感覚はあるが、疲れているんだろうか。缶コーヒーでも買って、一息つこう。

「あの、マンハッタンカフェさん？ 私のスカウトの返事は……」

？」

「……………」

「マンハッタンカフェ？ 聞いてくれているかマンハッタンカフェ？ おーい」

◇

「ふう……………」

木陰のベンチに座り、ブラックコーヒー 苦いだけの汁を喉奥に流し込む。

余韻も何もないが、気持ちを切り替えるだけならむしろこのわざとらしい苦みが心地よかった。

手元の資料でマンハッタンカフェの項目に改めて目を通す。

入学以来目立った成績もなく、どちらかといえば女優としての活動に重きを置いているような来歴。

走っている様子の映像もいくつか目を通したが、柔らかな走りこそ今と相違ないとは言え、レース展開やあの死角を突く差し脚は一度目にすれば忘れないはず。

彼女の本格化はだいぶ最近であったのだろう。誰もあそこまでのウマ娘とマークはしていなかったように見て取れた。

(どうしようかなあ。正直最後のレースはマンハッタンカフェ以外見てなくて他の子の走りなんて印象に残ってないぞ)

そんな状況で声をかけるのは失礼にもほどがある。しかし、当のマンハッタンカフェはもうスカウトの目はほとんどないと思っていだろうか。

今の俺の気持ちは、この缶コーヒーみたいに苦い。なんて、自嘲してみる。

「缶コーヒー、美味しいですか？」

「いや、正直不味いかな……………昨日飲んだコーヒーの方が美味しかったよ」

「ふふ、そうですか。それでは後でまた、コーヒーを淹れてさしあげますね」

「ああ、ありがとう………。？ ……。うわああ!」
いつの間にか隣に座っていた黒い影に、情けない悲鳴を上げてしま
う。

そこには、先ほどまでトレーニングコースの主役だったはずの『マンハッタンカフェ』がいた。

「マンハッタンカフェ!? な——」

「大丈夫ですか？ 拾いますね」

「あ、ああ、すまない。ありがとう」

驚いた拍子に膝から落ちてしまった資料を拾い集めてくれるマンハッタンカフェ。なぜ君がここにいるのかと問いたかったが、一先ず一緒にそれを拾い集めることにする。

「あら、これは………」

マンハッタンカフェの手が止まる。先ほどまで見ていたマンハッタンカフェのページが、地面に覆いかぶさるように接して開いたままになっていた。

正直、力を入れて調べを入れていたわけでもなく、学園の映像データと直近の授業の記録からまとめただけの簡潔なページだ。本人に見られるのは気恥ずかしいし、あまり注目していなかったのが一目でわかって申し訳ない。

「私の事、調べていくれたんですね」

どこか嬉しそうなマンハッタンカフェの声色に、申し訳なさが増す。

「正直に言うと、君の事はそこまで注目株として見たりはしてなかったんだ。だから俺のそのデータも、多分どのトレーナーでも知ってるようなことしか書いてないと思うよ」

「いえ、注目していないウマ娘の校内レースの成績も全てまとめるようなトレーナーさんは、少なくともあの場にはいませんでした。私をスカウトしてきた方々も、女優であることくらいしか知らないようでしたね」

うん、担当ウマ娘がない新人トレーナーの俺は、それくらいしかやることなかったんだ……………。

暇だから……………。

ウマ娘眺めるくらいしか仕事ないから……………。

「トレーナーさんも、先ほどのレースを見ていてくださっていますよなね？ 応援ありがとうございます……………いかがでしたか、私の走りは」

どうやら手を振ったのを覚えていたらしい。とすると、出遅れたのは本当に自分のせいだったのかもしれない。

謝った方がいいんだろうかとマンハッタンカフェを見ると、彼女の瞳はジツと俺を見据えていた。

月のような不思議な引力を感じる瞳に捉えられる。

彼女は真剣に、自分のレースに対しての感想を求めている。

ならば自分もそれに応えてあげなくては。

「うん。そうだね。君の走りは凄かった。一瞬で引きこまれたよ。レース全体を俯瞰する冷静さもデビュー前とは思えなかったし、勝負勘みたいなものかな？ 判断力も秀でてると感じた」

「そうですか……………。そんな走りを見て、トレーナーさんは私をスカウトしたいと思いましたが？」

「うん。まあ、当然それは思ったさ。でも——」

「そう、それはよかった……………でも、それなら」
ドンツ

世界が回転した。

いや、違う。回転したのは俺だ。

なぜ？ ウマ乗り戦国時代にウマ娘が戦場で武将の首を取る時、優れた下半身の力で身体を抑え込み身動きを封じた様から。転じて、人の上に跨ることになって俺を見下ろすマンハッタンカフェの存在が答えだろう。両腕も彼女の手拘束され、身動き一つとれない。

押し倒された事実がわかったところで、なぜ押し倒されたのかはわからないままだ。

何か、彼女の気に障るようなことでもしてしまったのだろうか。し

かし、心当たりはない。

今もただ彼女を褒めただけのはずなんだが……。
威圧するように無表情になったマンハツタンカフェが、ハイライトのない瞳で俺を見据える

「なんで、スカウトせずにあの場を去ったんですか？」

「……え？」

「貴方は私の走りに光るものを感じた。なら、トレーナーさんがスカウトをして私がそれを受け入れて、契約成立。そういう流れでしたよね……？　なのに、なぜ声の一つもかけずにそのまま行ってしまいませんか……？　意味が分かりません。納得のいく説明を要求します。まだ私が冷静でいられる間に……。」

いきなり成人男性を押し倒して身体の自由を奪うのは、彼女の中では冷静な行いなんだろうか……？

今の彼女の言葉をそのまま受け止めれば、彼女は選抜レースで最初から、数多くいるトレーナー陣の中で新人トレーナーの俺一人だけにアピールをして、走り終えてからは俺からのスカウトを待っていたということになる。

そして、自分が尻込みして声を掛けに行かなかったことに彼女は怒っているのだと。

でも、それはおかしい。だって――

「あの……ちよつといい？」

「はい、何でしょう」

「俺たち、初対面だよね？」

「はい、こうして直接お話するのは初めてですね。それが何か？　何か？　ではなく。」

「私は、トレーナーさんのことをずっと見ていました……。
トレーナーさんも、私のレースを見てくれました……。言葉はかわさずとも、私達には絆があります」

それ、もつと仲良くなった頃に言うセリフじゃないか？

「ん？ ずっと？」

「はい、ずっと、です。トレーナーさんがこのトレセン学園に来て、私達トレーナーのついていないウマ娘の授業を見ていらっしやった時。トレーニングを眺めている貴方の横顔を見た時、私は言い知れぬ『運命』を感じました。それから、時間があるときはいつも貴方を見ていたんですよ？ お役に立ちたくて、お手伝いとして他にも部屋を掃除してみたり、コーヒーを淹れてみたり……。コーヒー、気に入ってくれて嬉しかったです」

つまり、ここ最近の付きまとう視線の主。昨日、トレーナー室に立ち入ってコーヒーを置いていった犯人、すなわち『ストーカー』の正体――

「トレーナーさん」

マンハッタンカフェが、曇りのない瞳で俺の顔を覗き込む。

「トレーナーさんは今、私のことをストーカーと思いましたが？」

ふふっ、わかりやすいトレーナーさん……。可愛いですね
心が読まれた!?

拘束された俺は、彼女に何をされても不思議じゃない状態だ。怒らせてはいけないと脳が危険信号を発する。

「いや、ちがっ」

「ですが、それは誤解です。私はストーカーではありません……。幼子を諭すかのように、優しい声色でマンハッタンカフェは俺に語りかける。

「えっ……。…」

この子はいきなり何を言い始めるのか。

「まず、私がトレーナーさんをなぜずっと見ていたか、についてですが」

「そ、そうだ！ 俺の後を君はずっとつけてたんだらう？ それってまさしく――」

『『トレーナー』と同じ、ですね』

そう、ストーカー……。…」

「え？ トレーナー？」

「はい。トレーナーの方々は、ウマ娘のトレーニング、レース、日常生活……言うなればウマ娘の仕事を常日頃から視姦し、そこで気に入ったウマ娘がいれば、彼女たちを徹底的に調べ上げ追いまわすスカウトに勤まられていますよね」

ひ、人聞きが悪すぎる?! いや、トレーナーがやってることを悪し様に言い換えればそうなるかもしれないけど!?

「そして私は、トレーナーさんのお仕事を見つめ、そこで気に入ったトレーナーさんのことを調べるためにお傍にいた。つまり、逆スカウトのための準備をしていたということになりますね。トレーナーさんの中には、ウマ娘に気に入ってもらうために、スカウトの前から差し入れやトレーニングメニューを贈ることもあるでしょう。つまり、私がした差し入れも、それです」

……なるほど。一理ある……のか？

——いや、いやいや！ 一瞬納得しかけたがおかしい。

「逆スカウトって、例えば『リギル』の東条トレーナーや、『あの』奈瀬トレーナーみたいな『凄い人』たちに対してならわかるんだよ。でも、俺は実績も何もない、新人トレーナーで、君たちウマ娘にしたら不安要素だらけの博打みたいな存在だ。それを——」

自分の客観的評価を並べ、反論を試みる。

そう、どれだけ自分なりの努力をしてきたつもりでも、俺はウマ娘たちにとっては信用するに足らない存在だ。

一度しかないレース人生を預けるには、余りにも頼りなく、パートナーとして役者不足。

今日スカウトして失敗したウマ娘と同じように、マンハッタンカフェにとつてもそれは変わらないだろう。

なのに、なぜ。

「トレーナーさん。あまり自分を卑下しないでください。それは、貴方がいい、貴方でないとダメだと心から思っている私にとつても悲しい言葉です」

君はそんなにまっすぐな瞳で俺を見つめるんだ。

「トレーナーさん。貴方は先ほど私をスカウトしたいと言ってくれましたね。それは、私を見た目でスカウトしたいと思ってくれたのですか？」

「いや、違う……」

「では、女優のキャリアやレースの実績だけを見てスカウトしたいと思ってくれたのですか？」

「違うよ……」

「そうだ。見た目でもキャリアでも実績でもない。俺はあのレースを一目見たからこそ、君をスカウトしたいと強く思ったんだ。」

「もし、あのレースで私と一緒に走っていたのが、例えばシンボリルドルフ会長やマルゼンスキー先輩のような『凄いウマ娘』だったら、トレーナーさんはそちらを選んで私のことは気にも留めませんでしたか？」

「そんなことはない！ シンボリルドルフでも、マルゼンスキーでもない。俺は、マンハッタンカフェがいい！」

「っ……！ トレーナーさん……っ！」

「君がいい、君じゃなきゃダメなんだ！」

「……アツ。フウ……私も、トレーナーさんじゃなきゃ嫌です。東条トレーナーでも、奈瀬トレーナーでもなく、貴方がいいんです。わかっていただけましたか？」

「そうか、マンハッタンカフェはそれを伝えたくて。」

「俺を励ますためにここまでのことを……」

「そんな彼女をストーカー呼ばわりなんて、俺は何て失礼なことを言ってしまったんだろう。」

「ああ、ありがとう……。それとごめん。君を疑ってしまいました。改めてマンハッタンカフェ、俺は君の担当トレーナーになりたい。君と、トウインクル・シリーズを駆け抜けたいんだ。俺のスカウトを受けてくれるか？」

「はいっ、もちろんです。嬉しい……。あんな情熱的なスカウ

トでトレーナーさんの愛バになれたなんて、本当夢のよう

アイバ・・・・・・・・相バ？ 相棒つてことかな？

「ああ、二人三脚、相棒として頑張ろう！ よろしく！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ？ 急にマンハッタンカフェの雰囲気だ。

「そういえば、お仕置きがまだでしたね、トレーナーさん。私を焦らして、こんな道の真ん中ではしたくない真似をさせたお仕置き」

ふふふ、と冷たい笑みを浮かべて捕食者のような目つきのマンハッタンカフェが、女優の名に相応しい端正な顔を近づけてくる。

「えっ、ちよ、ちよつと?! マンハッタンカフェ!？」

「無防備に首元を晒して、誘っているんですか？ イケナイ人です・・・・・・・・。貴方はもう、私から逃げられない。それをちゃんと、自覚してください、ねっ」

ガプツ

「イテツ」

首筋に鈍い痛みがじんわり広がる。どうやらマンハッタンカフェに噛みつかれたらしい。

精神的に未成熟な、気性難な幼いウマ娘に多く見られる噛みつき癖。

大人びてクールに一見見えるマンハッタンカフェにも、少し子供らしいところがあるらしい。早速、彼女の新しい一面を知ってしまった。

でも、俺の首なんて噛んでも汚いし不味いだろう。これからはガムかスルメでも用意しておこうかな・・・・・・・・。

なんて、俺の首から歯を離してペロリと舌なめずりする、蠱惑的な彼女の顔をボーっと見ながら、そんなことを考えたのだった。



ザワザワ

「やべえ、あいつらウマ乗りして野外うまだつちでうまびよいするんだ!」「マーキングよあれ……」「な、何て情熱的な告白なの!?!」「こ、こんな白昼の往来で、ひよえく!」「これが中央……!」「不潔!」

そういえばここ、コース近くの道のベンチの前だったね……。そんな、往來の激しい場所でウマ娘に大の大人が押し倒されて、しかもその態勢のままスカウトするという、傍目には変態的な姿をさらし続けていたことになる。

自分の姿が周囲にどう映っていたのか、それを言葉による詳細な説明より雄弁に語る、向こうの方から爆走してくる生徒会副会長と風紀委員長バンブーメモリーの姿に、今日これからの予定が決まる瞬間を確信した。

第3話 宣戦布告

「き、き、き、貴様！ このたわけ！ 天下のトレセン学園の往来で、あろうことかトレーナーにウマ娘が、う、う、う、ウマ乗りになって、スカウトなど！ 倫理観の欠如甚だしい！」

「はい……………」

生徒会室。

正面の机に生徒会長シンボリルドルフ、眼前に立ちはだかる副会長エアグルーヴ。

気分は法廷に立つ被告だ。

ちなみにマンハツタンカフェはここにいない。

夕方から外せない仕事があるとのことだったので、どうにかエアグルーヴとバンブーメモリーを説得して、連行されるのは俺一人で済むよう彼女を見逃してもらった。

後日すっかりその埋め合わせはさせるし、今日はその分貴様をみっちり絞ってやろうと宣言したエアグルーヴの形相はそれはもう凄まじいものだったが。

「そもそも、なぜスカウトするのにトレーナーがウマ娘にウマ乗りされているのだ!? そしてなぜその体勢のままスカウトを決行する!? 貴様には常識というものがないのか、たわけ！」

「ごもつともです……………」

「トレーナーたるもの、大人として掛かるウマ娘を制御するのも務め！ それを貴様、逸ったウマ娘をやりたい放題させた挙句それに便乗するなど！ 中央のトレーナーというのはなぜこうも一癖も二癖もある輩が集うんだ!? 難関試験ではないのか!? 採用試験に倫理項目を入れるよう直訴しなければダメなのか!？」

「返す言葉もございません……………あと倫理の試験はありません……………」

「なら勉強した倫理に乗っ取って行動しろたわけ！」

「はい、面目次第もございません……………」

説教そのものもそうだが、何より年下の女の子に常識とか倫理とか

を掲げられて、正論のナイフでザクザク切りつけられるのはとてつもなくメンタルが削られる。

そして、精神がガリガリ削られたところで、本丸『シンボルドルフ皇帝』のお出ました。

こちらはエアグルーヴから一転、怒るではなく諭すように、静かに語りかけてきた。

「やあ、トレーナー君。事の顛末は報告で聞いているよ。私は今日は別件の用事があつてね。残念ながら直に現場を見ることはできなかったのだが……。情意投合^{じょういとうごう}、実に情熱的で気持ちの通じ合ったスカウトだったようだね」

「すいません……本当にすいません……クビは勘弁してください……」

「そう落ち込まないでくれていい。確かに君のスカウトは、その、まあ、少々、いや……かなり、生徒たちには刺激的だったようだが。倫理的にはともかく、校則を大きく逸脱したそれではない。こうして注意こそさせてもらうが、処分を下すようなものではないよ」シンボルドルフ会長から見ても倫理的にアレなスカウトだったようだ。

明日からどんな顔で学園を歩けばいいんだろう……。あの時は若干ハイになってたからか感じなかった恥ずかしさが今更押し寄せてくる。

でも、取り合えずクビは回避できたようでよかった……。担当ウマ娘ができたその日に解雇とかシヤレにならない。

胸を撫でおろす俺に、シンボルドルフ会長は笑顔のまま更に続ける。

「それはそうとして、報告の中で興味深い話を聞いてね」
「？」

『シンボルドルフより、マルゼンスキーよりも、マンハツタンカフエがいい』だったか。意気衝天^{いきしやうてん}。いや、実に熱烈で苛烈な口説き文句だ。『皇帝』や『怪物』など君の眼中にない、か。……私た

ちも、無礼ナメられたものだな」

!?

いや、確かに言ったけど！

あれは言葉の綾というか話の流れでしてね。別にシンボリドルフ会長やマルゼンスキーが眼中にないだとか、貶めるような意図は断じてないですよ。

と、いう弁明をしたかったのだが、笑顔のまま底知れぬ威圧感をビンビンに発するシンボリドルフ会長の前に、一般人の俺は情けないことにしどろもどろになる。

そんな俺の醜態にまるで我慢の限界が来たかのように、シンボリドルフ会長が笑いを吹き出した。

「ぶっ、ははははは。すまないすまない、冗談だよ。君は反応がいいから、ついね」

「……えっ」

「トレセン学園のスクールモットーは『Eclipse first, the rest nowhere』。

全てのウマ娘に頂点を夢見る権利があり、目指す義務がある。それは当然、この私シンボリドルフをも超える存在であれということだ。高みを目指す傲岸不遜さは、好ましいことでありこそすれ、誰にも恥じることのない姿勢だ。シンボリドルフ、マルゼンスキー何するものぞ。その意気込みを『皇帝』として肯定しよう」

父親のように雄大で寛大、だが尊大。なるほど、これが『皇帝』か。面と向かって初めてわかるものがある。

このウマ娘は、全てのウマ娘に期待をしている。『自分のいる高みに来い。挑戦してみせろ』と。

そして同時に、こうも思ってるのだ。『だがその上で宣言しよう。頂点は自分だ。我に従え、王道楽土へ導こう』と。

「だが、君たちはまだデビューすらまだのウマ娘と、何も実績のない新人トレーナーだ。大言壮語もいいが、まずは雌伏の時間だろう。切磋琢磨、トレーニングに励むといい。私からは以上だ」

「……。はい、そうします。ご迷惑をお掛けしました。では、

これで失礼します」

「あつ、おい貴様——」

一礼し、席を立ち上がる。

エアグルーヴが呼び止めようとするが、意に介さず生徒会室の扉に手をかける。

「ですが、一つだけ訂正させてください、シンボリドルフ会長」

「ん？ 何だい、トレーナー君。ああ、それから私たちに無理に敬語は使わなくていいよ。単純に年齢が君の方が上というのものもあるが、それ以上に、ここトレセン学園において君たちトレーナーはウマ娘を導く者であり、私たちウマ娘は導かれる者だ。それは、担当の関係になり私たちの間においても変わらない。気軽に話してくれたまえ」

なんだかあなたのような人間が出来すぎてる人にそう言われても、とても年下を相手にしているとは思えないんだけど……まあ、本人がタメ口でいいと言っているんだから素直に従おう。

「では、お言葉に甘えて。……」

大きく一つ、深呼吸。

シンボリドルフにまつすぐ視線を合わせ、見据える。決してそらさない。

「俺は、マンハッタンカフェのトレーナーだ。だから、担当ウマ娘である彼女がシンボリドルフを、マルゼンスキーを超える、超えられない存在だと本気で信じているんだ。大言壮語とか、意気込みとか思われるのは仕方ないけど、いつでも俺だけはそう信じていたいから。だから、まあ……精々首を洗って待ってくれ、『皇帝』」

「……！ ふつ。季布一諾、既に強い信頼で結ばれていると
いうことか。ならば、楽しみにしていよう。篡奪者を名乗る不屈者が私の眼前に現れるのを」

不敵に笑う皇帝に、見劣りしないよう精一杯に格好つけて笑い返す。

「ああ。では、失礼」

言ってしまった……何事もないように装っているが冷や汗ダラダラだ。

「というか、当事者のマンハッタンカフェのいないところで何やってるんだ俺。」

少しカチンときたからって、シンボリルドルフに宣戦布告する馬鹿がどこにいる？　．．．．．ここにいたよ。」

「後でちゃんとマンハッタンカフェには謝らないとな．．．．．知らない間にシンボリルドルフ超えを目指すウマ娘にされてたら流石に彼女も怒りそうだが、そこは相棒だ。ちゃんと説明しよう。」

「それに彼女もウマ娘、走って勝つことは大きな目標であるはず。それなら、いずれ進み続けた先にシンボリルドルフはいるのだから、意識するのが早いか遅いかの違いだ。」

「．．．．．うん、こんな感じで説得してみよう。」

「マンハッタンカフェの説得方法を考えながら、振り返らず生徒会室を出ようとして——」

ガシッ

「自然に失礼するなたわけ．．．．．！　確かに会長は処分はしないとはおっしゃられたが、貴様が学園の風紀を乱した事実には代わりはないんだぞ」

物凄い力で肩を捕まれ痛み振り返る。

そこには、青筋を浮かべて般若の形相になったエアグルーヴの姿。

「痛い痛い痛い!?!」

「さあ来い！　貴様には『自主的』な『奉仕活動』に勤しんでもらう。注意を受けに来たその足で、あろうことか会長に身の程知らずに喧嘩を売るなぞ．．．．．そのふざけた思考回路を矯正し、金輪際そんなことを考えられないよう徹底的に労働してもらおうぞ！」

「砕ける！　肩が砕けるから一旦離してくれ！　別に逃げないから！」

「ちようど昨日、教室が一つ爆発騒ぎを起こして困っていたのだ。貴様には一日で元通り使えるよう掃除してもらおう」

「爆発する教室って何だ!?!　待ってくれ、そんなところに行きたくない！　シンボリルドルフ会長助けー！」

ボタンツ！

◆
エアグルーヴに連行されたトレーナー君の阿鼻叫喚の断末魔を遮るように、無慈悲に閉じられたドアを見て苦笑する。

爆発した教室とは、『彼女』がヤンチャをした教室だろう。大変な重労働にはなるだろうが、なんだかんだと面倒見がよく、かつ、綺麗好きエアグルーヴのことだ。

見るに見かねて、そして耐えかねて彼女も掃除に参加することだろう。

さて、トレーナー君たちもいなくなったことだし、

「そろそろ出てきたらどうだ。マルゼンスキー」

私の呼びかけに応じて、会長席の陰からひよつこりとマルゼンスキーが顔を出す。

「ううくん！ ずっと黙ってジツとしてるのって疲れちゃうわねえ」

「なら無理せず顔を出していればよかったのに」

「やあねルドルフ。冗談はよしこちゃん。お説教なんて堅苦しい場所、私には合わないわ。チョベリバよ」

「……彼女の友人には冗談が得意なよしこちゃんという女性がいるんだろうか。」

それは是非紹介に預かりたい。

先ほども、緊張したトレーナー君の気持ちを解そうと皇帝と肯定をかけた私の鉄板ジョークを会話に織り交ぜてみたが、見事にスルーされてしまったところだ。軽妙洒脱な会話術への道のりは険しいな。

スルーするー……うん、これもまた今度披露してみよう。

「それでどうだいマルゼン。私としては挑戦者の登壇に喜ばしく思っているが、『怪物』として、トレーナー君の宣言はどう映った？」

「ルドルフや私に追いつき追い越せつてくらいの子になってくれるなら、もちろん私にとつてもバッチコイよ。それに、みんなの前で告白紛いのスカウトなんて、まるで月九の世界みたいでとってもトレンデイでムネズツキユンね！」

朗らかに笑うマルゼンスキー。しかし、ふっとその表情が暗くなる。

「でも、ただ楽しく走ってるだけの無責任な私のそれと、ルドルフ、皇帝であるあなたを超えるということ。口にすれば似ているようでも、その本質は大きく違うわ。あなたの背負ったものは余りに重いから」

マルゼンスキーが私の頭を後ろから抱えるように掻き抱く。

確かあすなる抱きと、マルゼンスキーは呼んでいたか。

伝わる親愛の情を心地よく思う。

私の首を温かく包み込むマルゼンスキーの腕に手のひらをやり、労わるように撫ぜる。

「私はその重みを苦ではなく喜びと感じている。だから気に病むことはないよ、マルゼン」

「……………ダメダメ、おセンチになっちゃわね。許してちよんまげ！」

大輪の花が咲いたような喜色満面の笑顔に変わり、下げた頭の上で手をパッと広げるマルゼンスキー。

……………なるほど、手のひらで頭の上のちよんまげを再現しているのか！ ボディランゲージと言葉遊びを組み合わせた高等ギャグテクニクに戦慄する。

やはり君は恐ろしい『怪物』だ。油断ならないなマルゼンスキー。

「やっぱりあなた超えて言うならまずはクラシック三冠路線かしらね。どう？ マンハッタンカフェって子はいいい線行きそう？」

「千異万別、三冠だけが絶対の価値ではないし、そのみが私を超える道でもないさ。もちろん、三冠はトウインクル・シリーズの華。ウマ娘やファンたちはその冠の輝きに魅了されるのは事実だがね」

そして思案する。彼女が三冠路線で戦う様子を。

「確かに、マンハッタンカフェには秘められた才能の片鱗を感じていた。それが本格化によって開花して、そしてあのトレーナー君の手によって磨き上げられたのなら、きつと素晴らしい走りを見せてくれることは信じて疑っていないよ。しかし、三冠か……」

「あら？ 何か気になることも？」

「彼女のクラシックは、例年にも増して一冠取るだけでも至難の業になるだろう。高材疾足、才気煥発。眠れる獅子が、その伏せた巨軀を起こし眼を見開いたからには」

「ふーん。それって、今日あなたが駆り出されてた用事に何か関係があるのかしら？」

「フフ。さて、それは今後のお楽しみ、とでもしておいてくれ」

「もう！ ルドルフの意地悪！ オタンコナス！」

ポカポカと私の肩を叩いてじやれ付いてくるマルゼンスキーをいなしながら、彼らの行く道の険しさに嘆息し、そして期待する。

あの『閃光』のような才能を誇るウマ娘の前に、君たちはどう立ち向かうのか。来年のクラシックが今から待ち遠しいよ。

第4話 噂のコンビ

「と、言うわけでシンボリルドルフに負けないくらいのウマ娘目指して、これから頑張ろう!」

翌日午後。

トレーナー室で最初のミーティングを始めた俺とマンハッタンカフェは、昨日の生徒会室での一件を話し合っていた。

「………。トレーナーさん」

テンションを上げて「オー!」と手を突き上げてみるが、ジトーとした目つきのマンハッタンカフェにいたたまれなくなり、頭を下げる。

「……マンハッタンカフェの気持ちも確認せず勝手に突っ走った! すまん!」

「……ふう。顔を上げてくださいトレーナーさん。別に怒ってはいませんか」

「マ、マンハッタンカフェ!」

「呆れてるだけです」

「本当にごめん!」

嘆息するマンハッタンカフェ。

しかしクスリと笑って続ける。

「デビューもまだの私がシンボリルドルフ会長たちをどうこう言うのは気が早いとは思いますが、実際、いつかは狩りたいたかひと思っていた獲物もくひようではありますので。なので、怒ってないのは本当ですよ」

「えっ、そうだったのか?」

「はい、あれ程の実力者と本気のレースで走れたらどれだけたの気持ちいでしょう……。考えるだけでゾクゾクしますね」

獰猛な笑みを浮かべるマンハッタンカフェ。

やはり彼女はクールな雰囲気、立ち居振る舞いの下に、燃え上がるような情熱を秘めた子のような。

「よし! どこまでも何だってサポートするからな! できることは何でも言ってくれ!」

「何でも……ふふ、ええ、ちゃんと焚きつけた『責任』……取ってくださいね？」

事後承諾のような形にはなってしまったが、こうして大目標は決まった。

次は中目標。トウインクル・シリーズを駆け抜けていく上で、彼女がどのレースを目標にしているかを確認する。

「マンハッタンカフェは、何か出たいレースとかあるのか？ もしあれば、そこに向けたトレーニングメニューを組んでいきたいと思うんだけど」

ウマ娘の中には、家族の影響だったり幼い時の憧憬からなのか、特定のレースに対してとても強いこだわりを見せる子がいる。

マンハッタンカフェにそういうものがあるのか、それを確認してきたかった。

「……正直なところを言えば、私、特に目標にしているレースとかはないんです。強いウマ娘たちと、血沸き肉躍る殺し合いがたくさんできるなら、そこが重賞ではなくオープンクラスでも、野良試合だって構わないですよ」

「走るこそそのものが目標か……」

「なので、方針や目標レースは全部トレーナーさんにお任せします。私の全てを貴方に委ねます。トレーナーさんなら、きつと私の『欲望』を満たしてくれると信じてますから。どうぞ、貴方の思うままに私を走らせてください」

マンハッタンカフェは笑みを浮かべ、軽い口調でサラリと言っているが、これは……もの凄いプレッシャーだ。

彼女のレース人生の白紙委任状が、今まさに俺の手の内に渡ったに等しい。

晩御飯の献立に、「何でもいい」と答えられた母親の気分というのはこういうものなんだろうか。

彼女の選抜レースの走りや学園に記録された各レースの記録を見れば、中距離以上に適正があるのであろうということはわかっている。

中距離以上のレースに適正があるとなれば、トレーナーとしてはクラシックレースの大本命『皐月賞』『日本ダービー』『菊花賞』の三冠路線をまずは大きな目標として掲げたいとなるのが正直なところだ。

だが、彼女は熱いレースならどこでもいいと言っている。

それなら、杓子定規にクラシック三冠路線にこだわるのではなく、出走するウマ娘たちの顔ぶれを重視してシニア混合の重賞を目標に据えたほうがいいのではないだろうか。

だがどちらを取るにせよ、シニア混合のレースに出られるようになるのは6月以降なので、それより前に行われる皐月賞や日本ダービーは直近の予定としては申し分がない。

レースへの場慣れも兼ねて、来年の春頃までに何度かオープン戦や重賞を走らせてみて、その仕上がりで出走するレースを決めていく方向で調整してみようか。

「うーん……そうすると、直近の照準は弥生賞……いや、ホープフルステークスもありか……朝日杯……流石にマイルはどうなんだろう……」

どれくらいの時間悩んでいたのだろうか。意識の底に潜り込んでいた俺を現実に戻したのは、鼻腔をくすぐるかぐわしい香り。

瞬きして視線を前にやれば、二つのマグカップを持ったマンハッタシが、湯気の立つコーヒーの注がれたその一つを目の前に差し出してくれていた。

「二息、つきませんか？」

◇

「はあ……落ち着くなあ」

胃に落ちたコーヒーが、体全体をじんわりと温めてくれる。

凝り固まった頭も解されていくようだ。

「コーヒーには、リラックス効果がありますから。私も、疲れた時や悩んでいる時はこうして一息つきます……」

「そういえば、この前もコーヒー淹れてくれたんだったね。好きなんだね、コーヒー」

トレーナー室の一角。マンハッタンカフェ専用スペースとして自由に使ってくれていいと伝えたそこには、アンティークな喫茶店によく見かけるハンドル式のミルから、知識のない俺には何のための器具なのかよくわからない見たこともないものまで、ズラリと並んでいる。

マンハッタンカフェが運び込んだもので、全てがコーヒー用品らしい。

「はい……。元は家で母が飲んでる姿に憧れてマネをして飲んでいたものですが、今ではすっかり」

「お母さんの影響なんだ。仲がいいんだね」

「ええ、私の尊敬する人です。今は引退しましたが昔はアメリカの映画界で活躍していた女優で、更にその前はアメリカのレースを走っていたんです。私が子役として芸能界に入ったのも母に近づきたかったから。なので、ある意味では母こそが私の人生における目標と言えるかもしれませぬね」

母の事を語るマンハッタンカフェの表情は、普段の大人びたものは違い年相応の少女に見える。

大好きなんだろうな、お母さんの事。

「それにしても、本当に君の淹れるコーヒーは美味しいよ。缶コーヒーとかインスタントばかり飲んでたから、こんなに違うんだってビックリした」

何というか、ブラックコーヒーなのにほのかに甘みを感じるのだ。あまり喫茶店に馴染みがなく、ブラックと言えば缶コーヒーのように苦みとエグイ酸っぱさ一辺倒で甘いのが飲みたいなら砂糖をドバドバ入れるものと認識していた。

「コーヒー豆は挽くと酸化が始まります。なので、飲む直前に豆から挽くことで、コーヒーの果実が持つ本来の甘みを楽しめるんです。缶コーヒーやインスタントコーヒーは手軽に安価に飲める代わりに、大量生産しやすい苦みの強い豆を使用してそういったコストは切り

捨てていますから」

「へえ、勉強になるなあ」

「あの……もしコーヒーに興味がおありでしたら、今度私が豆を買いに行くとき、よろしければご一緒していただけないでしょうか？ トレーナーさんの好みの味を知っておきたいので」

遠慮がちに聞いてくるマンハッタンカフェだが、こちらとしても断る理由はない。

忙しい中でせっかくのプライベートに俺と一緒にいいのかわかと思うが、彼女の方から誘ってくれているのだし、今は気にしないでいだろう。

「ああ、迷惑じゃなければ是非」

「！ ふふ、ではまたお声をかけさせていただきますね」

「楽しみにしてるよ」

……うん、マンハッタンカフェのコーヒーのおかげで考えもまとまってきた。

「ひとまず来年の6月までは順当にクラシック三冠路線の皐月賞と日本ダービーを目標にやっつけていこう。そこから先はそのまま三冠路線を続けるか、早いうちにシニア混合の重賞目指すかは未定だけど、三冠に拘泥はせずその年のシニアやクラシックの熱量を見ながら判断する。今年に関しては当面はG1レースであるホープフルステークスを目標に据えるが、これに関しては今後のトレーニングやレース次第で変わる程度の優先度にしておく。マンハッタンカフェは、それでいいかな」

「ええ、もちろん。必ず、トレーナーさんの期待に応えてみせましょう」

最初の目標も決まった。

今日からいよいよ俺たちのトゥインクル・シリーズのスタートだ。

「よし、それじゃあ早速トレーニングを始めようか。俺は先にコースに行つて準備しておくから、マンハッタンカフェもトレーニングウェアに着替えたら来てくれ」

「はい。それではトレーナーさん、また後で」

一旦マンハッタンカフェと別れ、トレーニングコースへと向かう。トレーニングコースでは既に多くのウマ娘がトレーニングを始めていた。

俺も予約していたコースの一角に陣取り、マンハッタンカフェのトレーニングの準備を進める。

すると、後ろからポンポンと肩を叩かれた。

「よっ、やってるかい」

軽い調子で声をかけてきたのは沖野トレーナー。俺の新人トレーナー研修を担当してくれた先輩で、トレセン学園でも一目置かれるチームスピカを率いる実力派だ。

「沖野トレーナー！ お疲れ様です」

「準備してるとこ悪いな、邪魔したか？」

「いえ、まだマンハッタンカフェも来てませんから大丈夫ですよ。それで、どうかしましたか？」

「いや、用って用はないんだがな。可愛い後輩に担当が見つかったってんで祝福でもと思っただけ。どうよ？ 今夜一杯。奢るぜ？」

あの万年金欠の沖野トレーナーが奢りとは珍しい。……ああ、そういえば今日給料日か。

「奢りは嬉しいですけど、先に東条トレーナーにお金返した方がいいんじゃないですか？ だいぶツケ溜まってると聞いて聞いたような」

「へーきへーき、おハナさん優しいから。そんなじゃ、今夜いつものバーに集合な。で、どーよ初めての担当ウマ娘とは。上手くやってけそうか？」

「ええ。目標レースも決まって今日から本格始動です。沖野トレーナー、選抜レースまでに色々アドバイスありがとうございました」

「気にすんなって。でもま、礼代わりってわけじゃないが、今夜は酒の肴ってことで噂の真相バツチリ聞かせてもらおうからよろしくな。ラブラブコンビの片割れさん」

突然の爆弾発言にブツとむせ返る。

「ら、ラブラブコンビ!? 一体何の話です!?!」

噂の真相の前に発言の真相を教えてくださいと言いたいが、沖野トレーナーはそれに答えず俺の後ろを指さす。

振り返るとトレーニングウェア姿で駆けてくるマンハッタンカフェが見える。

「まーたとぼけちゃって。ま、節度は持てよ。それじゃ待ち人は来たようだしお邪魔虫は退散するぜ。じゃあな」

ポケットに片手を突っ込みもう一方を後ろ手にヒラヒラ振りながら、沖野トレーナーが立ち去る。

「沖野トレーナー！ ちよつと!？」

できるなら追いかけたかったが、こちらに来るマンハッタンカフェを置きざりにするわけにもいかず、沖野トレーナーの背中を見送るところしかできない。

追及は今夜の酒の席までお預けだ。

「……トレーナーさん、お待たせしました。あの、今の方は？」

「えっと、頼れる先輩、かな？ うん、頼りになるけど頼りにならない人だね」

「それは、どっちなんでしょう……？ でも、とてもいい人ですね」

「えっ、何で？」

「ふふ、ウマ娘は耳がいいんですよ」

「？」

答えになっているようで答えになっていないマンハッタンカフェの返答に、首をかしげる。

「まあいいか。それじゃ、時間も惜しいしトレーニングを始めようか」

「はい。よろしく願います、トレーナーさん」

動的ストレッチで身体を温め、軽めのジョギングでウォーミングアップを済ませたマンハッタンカフェに練習メニューを指示する。

「それじゃ、今日は距離は短めにマイルの一六〇〇m。ラストの直線の手前に坂があるから、登り切ったからの直線でスパートできるよ

うにペース配分には注意してくれ。インターバルを挟みながらまずは5本行ってみよう」

「はい。それでは行ってきます。目を離さないで私のことを見ててくださいね」

「ああ、すっかり見てるぞ！」

「………行きます」

駆けだすマンハッタンカフェの様子を観察する。

選抜レースで見た通りしなやかな走りだ。線が細く小柄な印象には似つかずストライドの大きい、まるで跳ねるような走りです。徐々にスピードに乗せてゆく。

加速スピードは緩やかで、所謂スプリンター、マイラー特有の瞬発力と比較すれば物足りない。

やはり彼女の脚にマイルの距離は短すぎるか。

本領は中・長距離でこそ活かされるだろう。

なら練習メニューも、スタミナとレース運びを見極めるレース感覚を中心に……。

そうやって頭の中で彼女の脚を分析している時だった。

グイッ！

「うわあ!？」

「おう、冴えねー貧相ヒソソな変態ヒョロ眼鏡！ 今暇か？ 暇だよな。

なら、ちよつくら面寄ツラ越かせや、アン？」

「アー……スイマセン。少シ、時間、イイデスカ？ エト……変態ヒョロ、サン？」

いきなり胸倉を掴んで俺を持ち上げ、ガンを飛ばしながら人を変態呼ばわりしてくる鹿毛のウマ娘と、その横で礼儀正しくペコリと頭を下げながらも、やはり変態呼ばわりしてくる葦毛のウマ娘。

い、いろいろ言いたいけど………とりあえず、降ろして………！

第5話 集い始める世代

「えっと、君たちは……?」

降ろしてもらえない気配がないので、とりあえず宙ぶりのまま相手の正体を確認する。

俺を片手で持ち上げもう片手に竹刀を握った、ツリ目で三白眼のウマ娘。青筋をこめかみに浮かべて、まるで「ビキッ」「ビキッ」という効果音でも浮かんでそうなくらいのメンチの切り方だ。

とても怖い。

「『根暗』の友達だ！ 文句あんのかゴラア！」

「君の存在に文句はないけどこの状況に文句はあるぞ!」

ダメだ、血が上っていて話にならない。

もう片方の葦毛のウマ娘に視線で助けを求める。

「? アー……コレガ、視姦、デス? イヤーン」

色白の肌にポツと朱が差し、身体を守るように抱きかかえたウマ娘。

「何『メリケン』にまで色目使ってたんだテメエ! ブツ飛ばすぞ!」

「違う違う!? 勘違いだから! グエツ」

救いはないんですかー?

すいません、沖野トレーナー……約束、守れそうにありません。

更に高く吊り上げられ、締まる首に死を覚悟したその時だった。

「何を……?」

俺を挟んで二人のウマ娘を相対す位置に立っていたマンハツタンカフェが、感情がストンと抜け落ちたような表情で、絞り出すような声でそう問い質す。

いつの間にかターフを一周して戻ってきていたらしい。

肩で息をしていることから、もしかしたら俺の様子を遠目に確認してダツシュしてきたのかもしれない。

「す、すまんマンハッタンカフェ。俺にも、何が何やら……」
「おう『根暗』、トレーニング邪魔して悪いな。すぐ終了らせつから、ちよつくら待機つとけ——」

「アニマルポツケさん、私、お節介焼きな貴女の事、結構好きなんです……だから、二度目はありません」

「その手を今すぐ離してください」

「!?!」

「? わっ」

アニマルポツケ——そうマンハッタンカフェが呼んだウマ娘の手が突然緩み、重力に従って俺の身体が自由落下する。

ポスッ

痛みを覚悟して目をつむるが、優しく受け止められる感触に迎えられる。

目を開ければ、優しく微笑むマンハッタンカフェの細腕に、所謂『お姫様抱っこ』の形で受け止められているのがわかった。

「怪我はありませんか? トレーナーさん」

「あ、ああ……ありがとうございます。……あの」

「どうかしましたか?」

「降ろしてくれない?」

流石にこの体勢のままは恥ずかしいと訴えると、なぜか名残惜しそうな表情をしながらマンハッタンカフェが俺の身体をそつと地面に降ろしてくれた。

「あのままでもよかったのに」

「勘弁してくれ……」

地に足がつく感覚に安心感を覚える。

いやあ、突然持ち上げられるからびっくりした。

乱れた服装を直していると、マンハッタンカフェが俺を持ち上げた

ウマ娘の方に歩を進める。

「さあ、アニマルポツケさん、サスケハナさん——説明してください」

◇

『アニマルポツケ』

『サスケハナ』

マンハッタンカフェからクラスメイトであると紹介を受けたウマ娘たちは、現在芝の上で正座をさせられていた。

「なんでアタシがこんな……」

「足、シビレ、デス……ツライ……」

プルプル震える二人に、改めて問いかける。

「それで、何であんなことをしたんだ？ 俺、君たちに何かしたか？」

「アアン!? それはテメエが——」

「アニマルポツケさん……?」

一瞬凄んだアニマルポツケだが、マンハッタンカフェの静止に威勢が弱まる。

「……テメエが、アタシの友達ダチの『根暗』を変態的な手で手籠めにしたって噂で聞いて、『根暗』に確認しても誤魔化シラバツくれるからよオ……なら、変態トレーナー本人に確認するしかねえじゃねえか」

「ええ!?!」

アニマルポツケの言葉に涙目のサスケハナも頷いていることから、アニマルポツケ一人の勘違いではなく、本当に広まった情報なんだろう。

しかし、手籠めって。そんな卑劣な方法でウマ娘に迫るようなトレーナーはこの中央にはいられないんだが……。

そのあたりは、年頃の少女特有の噂好きが事実を優先したってところだろうか。

「ソレデ、実際ノトコ、テゴメ、サレタンデス。カフェサン？ アト、テゴメツテ、ナニ？」

そんな真面目な顔で、女の子が手籠めを連呼しないでほしい。というか、どんな状況だこれ……。

「手籠めとは、○○○^{うまびよい}してうまだ^{ずきゆんじぎゆん}つちで△△△^{ずきゆんじぎゆん}ということですよ」

「Wow！」

「そして、私は手籠めされてはいません。残念ながら」

「Oh」

「マンハッタンカフェもそんな冷静に解説しない！ それに残念じゃないから！ それが普通だ！」

はあ、と溜息をついてマンハッタンカフェがアニマルポッケに向き直る。

「ですから、今朝もクラスで言いましたよね。私は何もひどいことはされていないし、自分の意思でトレーナーさんと契約をしたって。それがどうして……」

「んなもん、口じや何とでも言えるだろおよお。アタシは自分の目で確かめなきや気が済まねえ。だからこうしだな……」

「……そうですか。それなら、実際にその目で見てもらうしかないですね」

ゆらり、と立ち上がったマンハッタンカフェが、体は向こう正面に顔だけ振り向いて俺を見る。

ペロリ

舌なめずりをするマンハッタンカフェに、既視感と寒気を覚える。

「ま、待てマンハッタンカフェ！」

「お、おい『根暗』、オメエ何を……」

アニマルポッケの戸惑いの視線を背に受け、一歩、また一歩とこちらに歩を進めるマンハッタンカフェ。

「落ち着け！ 自棄になるな！」

「Unbelievable……」

手で顔を覆っているように見えて、指の隙間からチラチラとこちらを伺うサスケハナ。

「あ、ああ……」

イヤーツ！

◇

「あー……その……真剣生意気言つてサーセンっした！」

「ソーリー……ハヤトチリマシタ」

ガバツと勢いよく90度、あるいはそれ以上の角度に腰を折るアニマルポツケ。

ペコリと礼儀正しく頭を下げるサスケハナ。

俺たちの間には何とも気まずい空気が流れていた。

「うん……わかってくれたならよかったよ……うん……」
まだジンジンと痛む首元を摩りながら乾いた笑みを浮かべる。

「つまり、手を出したのも、手籠めにしたのも、どちらかと言えば私で、トレーナーさんは哀れな子羊ということです。わかっていただけ
ましたか？ ポツケさん、サスケハナさん」

濡れた唇を淫靡になぞりながら、妖しく微笑みかけるマンハッタンカフェ。

ズカズカと肩を怒らせながら近づいたアニマルポツケが、その笑顔にグーでげんこつを落とす。

ゴチンツ！

「……痛いです、ポツケさん」

「究極に理解したわボケ！ テメエが『根暗』の『ド変態』だったってことがな!! あー心配して損したってのクソが！」

怒りにまた青筋を浮かべたアニマルポツケ。

直情的だが根はいい子のようだ。

「でも、君はマンハッタンカフェのことを心配したから、こうして俺のところまで殴り込みに来たんだろ？ 恥じることじゃないよ……ちよつと、手が早いと思うけど」

「……………うつす。友達のために動かないのは女じゃねえッス」
顔を赤くしたアニマルポッケが、スカート裾を翻して校舎の方へと歩き出す。

「帰るぞ『メリケン』！ 迷惑かけたトレーナーさんへの詫びだ、い
らねえ噂はアタシらの手で消滅すぞ」

「アツ、待ッテクダサイ、ポッケサン！」
歩き出したアニマルポッケと、その背中をトテトテと追いかけるサ
スケハナ。

しかし、何かを思い出したようにアニマルポッケが立ち止まりこち
らを振り向き、拳を突きつける。

「おい、『根暗』。テメエもいよいよトレーナーが付いたってことは、
今年デビューなんだろう？ なら、アタシらはトゥインクル・シリーズ
でも同期で好敵手だ。友達だろうが、レース場で会ったら破壊す！
覚悟しとけ！」

「負ケマセン。勝ちマス、デス」

そうか、彼女たちはトゥインクル・シリーズでマンハッタンカフェ
で戦うことになるライバルになるのか。

「ふふ、ええ、私も楽しみにしてますよ……………」

不敵に微笑むマンハッタンカフェ。

ライバルの出現に、俺も胸が熱くなる。

「それから『根暗』。お前、『マッド』の話、聞いたか」

『『マッド』——タキオンさんの話、ですか？ いえ。私も出た選抜
レースを欠場したのは知ってますが」

「タキオン、サン。デビュースル、聞キマシタ。トレーナーサン、ス
カウトサレタ、ラシイデス」

サスケハナの言葉に、マンハッタンカフェが目を見開く。

「！ あの、タキオンさんが……………」

「まっ、アタシには誰がデビューしようが関係ねえ。全員まとめて
アタシの踏み台よお！ んじゃな」

「サヨナラ、マタデス」

今度こそ立ち去る二人の背を見送る。

タキオン——俺も、小耳に挟んだことがある。

とても凄い才能を持ちながら、授業もトレーニングも選抜レースも出ない異端のウマ娘。アグネスタキオン。

そして俺が一日がかりで片づけをした爆発教室の下手人だと、一緒に片付けしたエアグルーヴに聞いた。

何でもあまりにサボリの常習犯過ぎて、いよいよ退学の話まで持ち上がったことだったが、一体どんなトレーナーがそんな問題児をスカウトせしめたのだろうか。

先ほどのマンハッタンカフェの反応が気になったので、確かめてみる。

「マンハッタンカフェは、アグネスタキオンとも仲がいいのか？」

「えっ？ いえ……特によくはないですね。なぜか一方的に絡まれることはありますが」

「そうか。それにしても、さつき何かすごくびっくりしてたよな、マンハッタンカフェ」

「そうですね。自分で走る気を全く見せなかったあの人が、デビューしてトウインクル・シリーズに出場してくるといふ事実自体に驚いた、とでも言いましょうか。それに、何度私が誘っても併走もしてくれなかった人ですから」

「なるほど。それならレースで戦えるのが楽しみだね」

「はい」

頷くマンハッタンカフェ。

色々あったが、マンハッタンカフェのライバルたちのことを知れたのは大きい。

「よし、それじゃトレーニングを再開しようか。デビュー戦に向けて準備しないと。さつきの続きから、始めよう」

「了解しました。……今度こそ、ちゃんと見ててくださいね？」

ジト目のマンハッタンカフェにたじろぐ。

「す、すまない……もうあんなことはないと思うから。大丈夫だ」

さつき見てると約束したのを破ったことを根に持っていたらしい。

でも、あれは不可抗力だと主張していいと思うんだ。

宙づりにされるのは考慮してないよ、流石に。

第6話 不思議の国のアリス

「あの、トレーナーさん……。少しよろしいですか？」

デビュー戦も間近に迫ったある日の、トレーニング終了後。

機材の片づけをしていると、トレーニングウェアのままのマンハッタンカフェが少し遠慮がちに声をかけてきた。

「ん？ どうしたんだ？ もしかして、トレーニングの延長がしたいとか？」

「あ、いえ。そういうわけではなく……。あの、今日この後、お時間ありますか？」

「俺の？ うーん」

今日は一応この後、沖野トレーナーに飲みに誘われている。

以前、アニマルポケやサスケハナに襲撃された日の夜は、沖野トレーナーの誤解も解くためにとても骨が折れた。

しかし、それからも定期的に俺の相談だったり、沖野トレーナーの愚痴を聴いたり、男二人で飲みに行くことが増えたのだ。

「あ……ご予定はありましたら大丈夫です。大した用ではありませんから」

「……いや、大丈夫。俺の方が大した用じゃないから。この後だよな？ 機材を片付けてからなら大丈夫だ」

あつちには断りのメッセージを入れておけば大丈夫だろう。

というか、行くと結構な確率で俺が奢ることになるからな。あの人の飲み。

別にお金には困ってないし、あの人との会話はトレーニングの参考になることばかりだから授業料と思えば安いものなのだが、担当ウマ娘からの相談に優先するものでもない。

たまには自分の酒代くらい自分で出してもらおう。

頭の中で天秤の上下を結論付けて、マンハッタンカフェにそう返す。

「そう、なのですか？ ……ありがとうございます。では、一時間後に校門前に集合でいいでしょうか」

「いいけど、用って外なのか。どこに行くんだ？」
すると、マンハッタンカフェが少し困ったような、言い淀むような面持ちになる。

「……私の知り合いに、トレーナーさんに一度どうしても会いたいとおっしゃる方がいまして、その人に会っていただければ、と」

「俺に会いたいなんて変な人もいるんだなあ。どんな人なんだ？」

「私にとっては第二の父であり母のような人……私の所属する芸能事務所の、社長です」

◇

「おー、大きいビルだ」

マンハッタンカフェの呼んだタクシーに運ばれ到着した、都内某所。

目の前には、見上げるほどの長大なビルが鎮座している。

横には、帽子とサングラスで変装したマンハッタンカフェ。こういう姿を見ると、本当に芸能人さんなんだなあと改めて実感する。

どうぞ、とマンハッタンカフェに先導されて、関係者専用の入り口から中へ入ったそこは、人も建物も何というかオーラがあるというか、キラキラしていて、まるで不思議の国に迷い込んだように錯覚してしまう。

「こちらです、トレーナーさん。はぐれないようしっかりついてきてくださいね」

そんな世界を、まるで物おじせず我が物顔で闊歩するマンハッタンカフェ。

俺が知っている彼女は芝の上で汗を流すアスリートの姿だけだが、学生で担当である年下の彼女は、既に俺と同じように仕事をしていた、多種多様な経験を積み重ねている大人でもあるんだな、と不思議

な感覚を覚えながら、マンハッタンカフェの背中を追う。

名前は知らないが、多分テレビか映画で見たような覚えがある人たちと次々すれ違っていると、彼らは皆次々とマンハッタンカフェに親しげに声をかけ、続いてその後ろを所在なさげに歩く俺を胡乱な目で見てくる。

その度にマンハッタンカフェが上手く取りなしてくれるので不審者扱いは免れているが、正直なところ居心地が悪すぎて早く帰りたいのが本音だ。

興味のある人にとっては天国のような場所なんだろうが、俺はそういうのに疎すぎて何のありがたみも感じられないから、それに関して少し勿体ない気がしなくもない。

マンハッタンカフェの担当になったのだし、少しは芸能界にも興味を持つべきかもしれないな、と今更ながらに感じながら歩を進めた。

「着きました。ここです、トレーナーさん」

事務所の一番奥、一際豪華な扉をマンハッタンカフェがノックした。

「アリスさん。マンハッタンカフェです。トレーナーさんをお連れしました」

「ご苦勞様、入っていいわよ」

「……アリスさん？」

「失礼します。トレーナーさん、どうぞ」

「し、失礼します」

若干緊張しながら、マンハッタンカフェが開いてくれた扉を抜けて部屋へと立ち入る。

来客用の机とソファの奥に、大きな机に向かい事務をしている人の姿があった。

「いらつしやい、カフェちゃんのトレーナーさん。不躰な呼び出しをまずは謝らせてちょうだい」

濃い目の化粧と、派手な色使いと露出度の高いデザインの服に身を包んだ、しかし決して下品とは思わないで立ちのこの人が、俺を今日ここに呼んだ張本人。カフェの事務所の有栖川社長らしい。

年齢は……ぱつと見ではわからないな。

「いえ、そちらの大事な女優さんでもあるマンハッタンカフェさんを預からせていただいているわけですから。むしろ、今日まで挨拶に赴かず申し訳ありません」

「ふふ、真面目ちゃんねえ。どうぞかけて頂戴。今お茶を淹れさせるわ」

そう言つて、マンハッタンカフェの方を見る有栖川社長。

「とうわけでカフェちゃん。ちよつと外して、コーヒーでも淹れてきて。アンタ得意でしょ。10分くらいしたら持つてきてくれていいから」

「えっ。それは私に、この部屋にトレーナーさんとアリスさんを二人きりにしろと……?」

どこか怯えたような視線で有栖川社長を見るマンハッタンカフェ。

俺も……この空間にこの人と二人きりは、ちよつと怖いな。

「なあに、妬いてるのお? 小娘がいつちよ前に色づいちゃって。心配しなくても、アンタの男に手を出すほど私は男に飢えてないの! わかったらさっさと出てく! ほら! 大人同士の秘密のお話があるんだから!」

「……トレーナーさん。襲われそうになったら、すぐに大声をあげてください。私がすぐに駆け付けて、この人の息の根を止めます」

「本当にこの兄ちゃん襲われなくなったらさっさと動け! お前の目の前でチューすぞ!」

えっ。

「……わかりました。トレーナーさん。もし……チュー、されたら、この人の唇をえぐり取りますから安心して下さいね。では、お気をつけて」

そもそもチューをされたくないから、そんな血なまぐさい解決を提案されても安心できないんだが。

縫る俺の視線も空しくマンハッタンカフェが本当に出て行ってしまい、テーブル越しにソファに腰かけた俺と有栖川社長がサシで対面

する形になる。

「改めまして、当プロダクションで代表取締役を務めている有栖川と申します。気軽にアリスちゃんと呼んでね、トレーナーちゃん」
ウインクをスルーして挨拶を返す。

「ご存じとは思いますが、私がマンハッタンカフェさんの専属トレーナーをさせていただいているものです。若輩者ですが、よろしくお願ひします、有栖川社長」

「……身持ちが固いのね。ふふ、カワイイ。さつきはああ言っただけど味見したくなっちゃう」

ゾワツ

開幕一分で訪れる貞操の危機。帰りた。

「ジョークよジョーク。場を和ませようとしただけなのに、傷ついちやうわねもうっ」

プリプリと怒った様子を見せた後、真面目な面持ちに直る有栖川社長。

「それじゃ、本題入らせてもらうわね」

スツ

俺の前に横長の紙が差し出される。

「ここに小切手があるわ。好きな金額を書いて持って行ってちょうだい。それで、もうあの子に関わらないで」

……は？

◇

「あの子はね、この事務所を背負って立つスターなの。今もドラマや映画のオフアワーがバンバン来ているわ。海外からだってお呼びがかかっている。かけっこのトレーニングなんかで撮影のスケジュールに穴は開けられないの。それに、そんな子が過酷なレースでキズモノになっちゃったら、貴方どう責任を取ってくれるの？ 損害賠償億の世界よ」

タバコを吹かしながら、淡々と有栖川社長がマンハッタンカフェの価値を説く。

マンハッタンカフェにオファーが来ているという作品は、俺でも名前を聞いたことがあるようなアクション作品やミステリーが並んでいる。

「……………しかし、有栖川社長。トレセン学園に入るということはそういう世界に足を踏み入れることだと、あなたもわかっていたのでは？」

「トレセン学園は日本最高峰の学園。だからこそ、入るまでも国内最難関。そして、そんな才能溢れる地元じゃ負け知らずのすごいウマ娘がいざ入学できても、トレーナーにもついてもらえずデビューすることすらなく学園を去る子も珍しくはない……………そうなんですよ？　トレセン学園のトレーナーさんなら、その辺は私よりよくご存じのはずよね」

嫌味たらしい声色で、トレセン学園の抱える暗い側面をあげつらう。

トレセン学園は、ウマ娘の数に対して在籍するトレーナーの絶対数が足りすぎる。

それは、中央トレーナーという厳しい基準を求められる専門職の持つ問題点として、ずっと前から議論され続け、そしてそれでも未だに解決されない課題なのだ。

だからこそ、俺はその挑発を否定することができない。

「……………そういった学生がいることも、間違いではありません」
そんな俺を心底バカにしたように鼻で笑い、そして憎々しげに俺をにらむ有栖川社長。

「だから、私はトレセン学園なら目指してもいいわって許可を出したの。だって、あの子は母親譲りの演技の才能はあっても、レースの才能まで継いでるなんて思わなかったもの。なのに、あっさり入学決めちゃうから困っちゃったわ。それでも、デビューできないうちはまだよかった。『トレセン学園にもいたことのあるスター女優』は、テレビ用の肩書としては十分使えるし……………あとは、あの子がさっ

さで見切りをつけて退学するか、何もなのまま卒業するのを待つだけだったのに、あの子をスカウトするなんて、本当に余計な事してくれたわねえ」

「それは、マンハッタンカフェにあなたの予想を遥かに超えるレースの才能があり、それはトウインクル・シリーズでも戦い抜けるほど素晴らしいものだった。それだけのことです。彼女の、アスリートとしての才能も尊重してあげてください」

「女優には無用な才能ね。とにかく、私はあの子に『商品価値』の下がる危険が万が一にもあるレースデビューなんてされたら困るの。でも、私が無理に辞めさせるようなコトしたら、せっかく時間をかけて信用させたあの子に嫌われちゃう。だから、トレーナーちゃん。貴方があの子を捨てて、傷つけて、嫌な思い出になったレースの道を自主的に諦めるように仕向けたいの。協力してくれたらお金でも女でも何でも見繕ってあげるわ。だから、協力してちょうだい」

「お断りします」

こんな話、悩む必要すらない。

彼女を物扱いするこんな人とは、早く会話を終わらせたいという怒りもある。

「……. . . . わからない坊やねえ。貴方があの子を担当するのも、つまるところはあの子が凄いいレースに勝てばトレーナーの貴方にも相応のマナーの分け前があるからなんでしょ？　なら、その分を私が即金で立替えてあげるって言ってるの。あの子が勝てるかなんてわからないんだし、こっちの方が確実じゃない」

「俺は、お金が欲しくてあの子を担当しているわけじゃありません。そんなことはないと思いますが、もし彼女が一度もレースに勝てなくなったら、彼女がレースを辞めるその日まではいつまでだって支えるつもりです」

「なら、『女優』マンハッタンカフェのトレーナーっていう名声が有望み？　それなら、代わりに私が貴方を手取り足取り専属マネジメントしてあげるわ。テレビでチャホヤされるカリスマなんてお金さえ使えば簡単に作れるのよ」

「そういう話じゃないんです!」

見当違いの話が続ける社長に嫌気が差し、つい声を荒げてしまう。

「俺は『マンハッタンカフェ』の走りに惚れたんです! 金とか名声とか、そんなものはどうでもいいんだ」

白紙の小切手を破り捨て、紙屑となったそれを有栖川社長の目の前で落として見せる。

「……………後悔するわよ? マスコミなんて、私の声一つでいくらでも貴方を悪し様に書けるわ。その時貴方は世間の目に耐えられるかしら」

「彼女が自由に走れるなら、そんなことは俺が気にしなければいいだけのことです」

これ以上はどれだけ話しても平行線だろう。

俺はマンハッタンカフェに走ってほしい。この人はマンハッタンカフェを走らせたくない。

互いの利益と感情が重なるところを、今の俺には見いだせない。

「……………失礼させていただきます。俺にはどれだけ嫌がらせでも何でもしてくれていいですが、やるならマンハッタンカフェにはわからないようにやってくさいよ。彼女はあなたを信用しているようですから、あなたのそんな姿を見たらショックを受けてしまう」

立ち上がり足をドアへと向ける。

マンハッタンカフェを見つけて、さっさと帰ろう。それから、理事長やたづなさんに相談をして、今後の対策もしなければ。

俺は俺でやれることは全部やって、マンハッタンカフェを守らないと。

「……………そうね。でもごめんなさい。貴方を今返すわけにはいかないの」

俺とドアの間に立ちふさがり、進路を塞ぐ有栖川社長。

身長差で見下ろされるような形になり、威圧感に思わずたじろぐ。

「……………まだ、何か?」

引き止められるとは思わなかったので少々困惑する。

まさか、言葉で説得できないなら暴力でということか……………

? この体格差は厳しいぞ。

有栖川社長は身構える俺の肩をガシッと掴み、

「ええ。だって——

カフェちゃんのせつかく淹れてくれたコーヒー、まだ飲んでないじゃない！ 美味しいケーキもあるのよ！ あの子の学校でのお話とか、レースの面白いお話とか、たつくさん聞かせてちょうだい！」

……は？

……は？

◇

つまるところ、有栖川社長の話は全部嘘だった。

申し訳なさそうにコーヒーを持ってきたマンハッタンカフェに謝られながら説明を受けたところによれば、可愛がっているマンハッタンカフェについた専属トレーナーの人となりを自分の目で確認したいという社長の意向で、一芝居を打ったらしい。

私も中々の役者ねえとドヤ顔をされた時には流石にイラツとした。

「そもそも、この子にトレセン学園行くように勧めたのは私なのよ」

「へえ！ でも、これは俺が言うことじゃないですけど、さつき有栖川社長が言われた通り女優業をする上では、必ずしもトウインクル・シリーズに参加することはメリットばかりではないんじゃないですか？」

さつきの雰囲気から一転。三人でコーヒーとケーキに舌鼓を打ち

ながら、和やかに会話が進む。

「そりゃ、女優としてはね。だから、これは私のわがまま。ウマ娘しか味わえない、レースの世界っていう特別な時間を経験して人として一皮もふた皮も剥けてほしいの。社長として、経営者としては落第ね。稼ぎ頭で事務所のエースを開店休業状態にするんだもの」

開店休業？

俺のそんな疑問を浮かべた顔に答えるように、先ほど俺に見せた作品タイトルを羅列を指でなぞる。

「これね、ゼーんぶ断るつもり作品よ。映画とかドラマは拘束時間が長過ぎるから、少なくともこの子がレースをやってる間はこういう仕事はとらないつもり。CMとかバラエティとかそういう単発で済むお仕事の営業は増やすけどね」

本当の意味で休んじやったりしたら復帰も難しくなるし。そう、あつけからんと惜しげもなく語る姿は、とても数億円規模の仕事を切って捨ててる様には見えない。

「……可能な限り、お仕事と両立できるように配慮したスケジュールを組むこともできると思いますが——」

「トレーナーちゃん」

ピシヤリと、叱りつけるような強い口調に言葉を止められる。

「気持ち嬉しいけど、貴方の仕事は芸能事務所のマネージャーじゃなくて、レースのトレーナーでしょ？ なら、一番に優先すべきはレースのこと。いらぬ気を回して本分を忘れちゃダメよ」

「有栖川社長……」

「優しいのは美德だと思うわ。でも、私達のこの業界は生き馬の目を抜く因果な世界……『誰にでも優しい』は、そういう悪い奴らに真っ先に食い物にされる悪癖よ」

クソみたいな世界よね、と吐き捨てる有栖川社長。

「そうね。それじゃ、これが私が貴方にカフェちゃんを預ける条件。貴方はその優しさを、『マンハッタンカフェ』だけに向けてちょうだい。『マンハッタンカフェ』にとってだけは底抜けにいい人で、それ以外の全ての人にとって悪い人になるくらいの心づもりでいて」

ポン、と自分の横に座るマンハッタンカフェの頭に手を置きぐりぐりと揺らす。

マンハッタンカフェは嫌そうな顔をするが、決してはね除けることはせず、されるがままに身体を揺らされている。

「この子……カフェちゃんの親と私は親友でね。あの子の事は、それこそ文字通り生まれた時から知ってるの。……子供を産めない私にとっては、実の娘も同然。その私が、貴方を信頼してこの子を預けるの。その意味、貴方ならわかるわよね」

マンハッタンカフェのことを語る口調と視線は柔らかく、有栖川社長がマンハッタンカフェのことを深く愛しているのが伝わってくる。

マンハッタンカフェも、この人の事を父のようにも母のようにも慕っていると言っていた。

二人の間には誰にも立ち入れない強い信頼がある。その関係はとも尊く、そして羨ましいものがある。

俺とマンハッタンカフェも、トレーナーとウマ娘としてそんな強い信頼関係をいつか結びたいものだ。

そして、そんな人から彼女の仕事を任された。

その事実には、ずっしりとした重みを感じる。しかし、それは決して嫌な重さではない。

「はい、有栖川社長。約束します」

「……うん。この子を選んだ人だから心配はしてなかったけど、直接この目で見れてよかったわ。真面目そうで、この子の見た目や芸能人としての地位に目がくらんだあんぽんたんでもないってしつかりわかったし。貴方みたいな人があの子のトレーナーさんになっってくれたなら安心」

「……ですから、心配ないと説明したじゃないですか。アリスさんは、心配しすぎです」

どこか拗ねたような口調のマンハッタンカフェを見て、くすつと笑う有栖川社長。

どこか大人びたマンハッタンカフェも、この人の前では歳相応の子供っぽさを隠し切れならしい。微笑ましい物を見た。

「親心ってそういうものなのっ。少く私にもそういうケイケンさせてくれたっていいじゃない！ まっ、お仕事のことには心配しないでね、トレーナーちゃん。私の事務所は、こんな小娘一人の稼ぎが減ったくらいで潰れるほどヤワじゃないし、この子一人におんぶに抱っここの情けないメンバーじゃないんだから。だから、カフェちゃん、アンタもいらない気は回さないで、思いつきりブチかまして、こい！」

バンツと背中を思いきり叩かれたマンハッタンカフェが、目尻に涙を浮かべて有栖川社長を睨む。

「アリスさん……痛いです」

「あらやだ！ 私の感動的な愛に泣いちゃった!? そんな涙なんて浮かべちゃって、嬉しいわよん！」

バンツバンツ

「ですから、馬鹿力で叩かれて、痛いんです……！」

マンハッタンカフェから怒気が溢れているのが幻視され、慌てて止めに入る。

その後、暴走した社長に入った俺も張り倒されるのだった。

◇

『じゃあね、トレーナーちゃん。これ私の名刺！ いつでも連絡してきてちょうだい。トレーナーちゃんなら24時間365日いつでもウエルカムよん。それと、次はちゃんと『アリスちゃん』って呼んでよね！』

◇

それから数時間後、すっかり暗くなった夜の東京の街を、タクシ―の車窓から眺める。

帰り際に渡された有栖川社長の名刺を眺めながら、今日の出来事を思い返す。

半日以下の滞在とは思えない、濃密すぎる時間だった……。

「トレーナーさん、すいませんでした……。」
「いや……いろいろと貴重な体験ができたし、あの人と話せてよかったよ」

単純に私人としてもそうだし、これからマンハッタンカフェとトウインクル・シリーズを走っていく上で、あの人との繋がりはきつとプラスになる。

デビュー戦を前にしたこのタイミングでよかった。

「しかし、濃い人だね、あの人」

「……初見で、あの人への感想が濃いで済むトレーナーさんって、意外と大物だと思います」

なぜか呆れたような尊敬するようなマンハッタンカフェの視線に、そうかな、ちよつとびつくりしたけど滅茶苦茶いい人だったし……と答えながら、名刺に記載されたその名前と番号をスマホに登録した。

「有栖川重秋、つと」

有栖川重秋社長。

父であり、母であるというマンハッタンカフェの言葉通りの……父性と母性と兼ね備えたパワフルな——男性だ。

第一章 ジュニア級 第7話 メイクデビュー

今日はマンハッタンカフェのデビュー戦、『メイクデビュー』当日だ。

体操服に着替え終わったマンハッタンカフェと、用意された控室で打ち合わせをしていた。

「東京、芝、一八〇〇m。晴れ、バ場は良。うん、大丈夫。絶好のレース日和だ。いつも通りやればマンハッタンカフェなら勝てる。焦らず、落ち着いて、普段通りな〜」

「ええ。あの、トレーナーさん……」

「どうしたマンハッタンカフェ!? 喉が渴いたか!? 何か気になるところでも!?!」

「いえ、その……その話、二回目ですよ?」

!?

「ご、ごめん!」

「ふふっ、緊張してらっしやるんですか?」

からかうようなマンハッタンカフェの指摘に照れくさくなって、後髪を掻きながら答える。

「いやあ、何せ自分の担当ウマ娘の初めてのレースだから……。君は落ち着いてるなあ」

「そうですね……幼いころから大舞台や人前に出ることは慣れてますから。シチュエーションは変わっても、緊張はしないですね」

何というか、どっちがデビューする側なのかわからなくなってしま
うな。

いかんいかん。トレーナーとして、大人として俺の方が緊張してど

うする。

パチンと頬を叩いて気合を入れる。しつかりしないと。すると、そんな俺を見たマンハッタンカフェが提案してきた。

「トレーナーさん、よろしければコーヒー……飲まれますか？」

「いや、これからレースの君にそんなことを……」

「私、コーヒーを淹れている時間がリラックスできるんです。ですから、レースの前に淹れさせていただければ」

「いや、君は……うん、そうだね。一杯貰えるかな」

「はい」

嬉しそうに微笑んだマンハッタンカフェが、トレーナー室から持ち込んだ用具と控室に備え付けられたケトルを使ってテキパキとコーヒーを淹れ始める。

自分は落ち着いているのに、気負いすぎている俺の方をリラックスさせようとしているのだろう。なんだか、マンハッタンカフェには気を使わせてばかりだな。

でも、ここで落ち込んだらそれこそ申し訳がない。気持ちを切り替えて、レースをしつかり支えよう。

◇

コーヒーを飲んで一息つき、最終的な情報を共有していた時だった。

コンコン

「ん？ 誰だろう。どうぞ」

中から入っていいと伝えると、控室のドアが開けられ数人のウマ娘がやってくる。

「ドウモ、デス。カフェサン。元気シテマス？」

「よう『根暗』！ 邪魔すんぜ！ おら『マッド』、テメエもさっさ

と来い！」

入ってきたのは鹿毛と葦毛のウマ娘、アニマルポッケとサスケハナだった。

よく見るとアニマルポッケの手は誰かの制服の襟をつかんでおり、その誰かをグイッと引つ張った。

「うう．．．．襟が伸びるから引つ張らないでくれたまえよポッケ君。別に逃げたりしないよー私は」

「嘘吐け『マッド』！ さっきもそう言ってスタコラ逃亡トンスラしたろうが！」

『マッド』．．．．彼女がアグネスタキオン。噂の問題児か。

「皆さん、どうしたんですか？．．．．タキオンさんまで」

アニマルポッケとサスケハナに呼びかける声は柔らかかったのに、アグネスタキオンの姿を認めたたん、露骨なまでに嫌そうな顔になるマンハッタンカフェ。

彼女がここまで感情を露にするアグネスタキオンとは一体．．．．。

「やあやあカフェ！ 元気かな？ 緊張でアガってしまつてレースどころじゃないかい？ それなら丁度ここに気分を鎮静させるとつておきのドリンクがあるんだ。特別に一つあげよう！ なあに、今回は既にうちの可愛いモルモット君で治験済みさ！ 安全は保証されているから不安がらず今すぐ飲んでくれたまえ！ さあ！」

まくしたてるようにマンハッタンカフェに詰め寄りながら、懐から取り出した怪しげな飲み物をグイグイと押し付けるアグネスタキオン。

迷惑気なマンハッタンカフェの表情も何のその。なるほど、この押し強さはマンハッタンカフェが避けたがるのも少しわかる。

その背後にヌツと迫ったアニマルポッケが、強引にアグネスタキオンの手からドリンクを奪い取った。

「ああっ！ 何をするんだポッケ君！ これはカフェのためにがぼっ」

抗議の声を上げようと開けたアグネスタキオンの口に、アグネスタキオン謹製ドリンクの飲み口が捻じ込まれる。

「これからレースって時に妙ちくりんな薬物乱用させようとしてんじやねえよ。丁度いいから自分で飲んでその興奮鎮静めろ」
もがいていたアグネスタキオンだったが、段々とその勢いが弱くなり、そして手がだらんと下がる。

「お、おい!? アグネスタキオン!? し、死んだり……」
あまりにショッキングな光景に悲鳴を上げてしまう。しかし、三人は全く動じない。

「大丈夫デス。トレーナーサン。タキオンサンノ才薬。デンジヤラス、デモ、人体ニ危険、アリマセン、デス。Wow! タキオンサン、今日ハ光リ輝イテマス。ケミカルブルー……」

ボケーつと宙を見上げ一言も発しなくなったタキオンの身体が青い蛍光色に光り輝く。とりあげず……。息はしているし反応もあるから、大丈夫ってことでいいだろうか。

眩しいのでとりあげず控室においてあったひざ掛けを頭にかけて発光部位を覆い隠し、部屋の隅の椅子に座らせておく。

「騒がせちまつたな『根暗』。アタシらは今日は応援だ。せつかくの友人のデビューだつてのに『マッド』の奴、いつも通り部屋に籠つて実験するとか言うから無理やり連行^{シヨツペ}してきたんだが……。連れてこない方がよかつたかもしんねえな」

「そうですね……。お二人の応援は嬉しいですが、タキオンさんはいらなかつたですね」

辛辣に評するマンハツタンカフェ。その言葉に反応して、ガバツと勢いよく立ち上がりひざ掛けを頭から振り落とした、青く輝くアグネスタキオンが抗議する。

「おいおいおい! そりゃあないだろうカフェ! せつかく私が君のために、貴重な実験の時間を捨ててこうして来てあげたんだよ! もつと喜んでくれたまえよ!」

「モウ復活、シマシタデス。デモ、ケミカルブルー……」
「副作用さ。モルモット君は半日こうだったから、私も今日一日はずっと光っているだろうねえ。はっはっは」

「そんなものをレース前に飲まそうとしないでください……」

ワイワイ

その後も騒がしくも和やかに四人の歓談は続く。出走時間の少し前まで彼女たちの声が止むことはなかった。

◇

出走するマンハッタンカフェとはコースへ続く通路の途中で別れ、応援に来てくれた皆とともにゴール板すぐ横の観客席に陣取る。

青く発光するアグネスタキオンに周囲がざわついていてそのため、とりあえず俺のスーツを頭の上から被せておいた。

重いよー動きにくいよーなんかイカ臭いよーと駄々をこねているが、そもそも原因が原因なのだから甘んじて受け入れてほしい。

「そういうえば、君たちはもうデビューはしたのか？」

俺の質問に、三人とも首を横に振る。

「アタシは来月の予定だな。『メリケン』も『マッド』もまだ先だろ？」

「ハイ。トレーナーサント、相談シテマス」

「私はどうだろうねえ。モルモット君は熱心に走らせたがってるけど、その辺りは私が時を決めるさ」

「……さつきから気になってたんだが。」

「モルモット君って、もしかして君のトレーナーのことなのか？」

アグネスタキオン。モルモットなんて名前のトレーナーは学園にいなかったと思うんだが……まさか」

当たってくれるなよ、と思いながら訊ねる。

「おいおい！モルモットなんて珍妙な名前をつける親が世界のどこにいるんだね。愛すべき実験動物であるトレーナー君の愛称に決まってるじゃないか！」

何を当然の事を聞くんだと言わんばかりの呆れ顔に戦慄する。

当たってたよ……まさか自分から進んであんな薬を飲みたがる変な人もいないだろうし、アグネスタキオンに弱みでも握られて

しまったんだろうか。

どこの誰かは知らないが、彼女の実験台にされてしまった哀れなトレーナーに黙とうを捧げる。

「あつー、『根暗』が出てきたぜ！」

ターフに青鹿毛の少女が姿を現す。

女優として知られているからか、デビュー戦とは思えない声援が客席から飛ぶ。

知名度としては抜きんできているが、それは場合によつてはプレッシャーになりうる。

しかしマンハッタンカフェは堂々とした姿のまま、客席へ笑顔を浮かべながら手を振っている。流石の舞台慣れだ。

「うっへえ。『根暗』の奴があんなニヨニヨ愛想笑い浮かべてんの、なんか気色悪^{キメ}な。もっといつも通りの仏頂面でいろよ」

アニマルポッケのひどい感想はスルーして、観客に負けじとマンハッタンカフェに声援を送る。

すると、俺たちに気づいたのかマンハッタンカフェがタタツと客席に駆け寄ってきた。

「トレーナーさん、皆さん」

「マンハッタンカフェ、君なら大丈夫！」

「アタシら四人のデビュー^{イチバンリ}先鋒なんだ。派手に大暴れ^{ブチカマ}してこいや！」

「Oh！ 俗ニ言ウ鉄砲玉、デスネ！ ファイトデスヨ！」

「それを言うなら切り込み隊長だろうサスケハナ君。カフェ、君の才能、しかと観察させてもらうよ。君の脚で私を魅せてくれたまえ」
口々に声を掛ける俺たちに、一つずつ返答を返していくマンハッタンカフェ。柔らかな微笑みで落ち着いた様子だった彼女だったが、アグネスタキオンへと視線を移した瞬間、能面のように表情が抜け落ちた。

「Yikes!! カフェ、サン………?」

「………タキオンさん。その服は、なんですか?」

マンハッタンカフェが、ゆらりと幽鬼のような動きでアグネスタキ

オンの頭上を指す。

「服？ ああ、これか。君のトレーナー君が、嫌がる私に無理やり被せられたんだよ。青く光ってるだけで害なんてないんだから、放っておいてほしいものだ」

「そうやって人聞きの悪いことを……そういうわけにはいかないだろ。こんな近くに光ってるウマ娘がいたら、集中できなくなつた周りの皆に迷惑がかかるんだから」

「その程度で気を散らす方がどうかと思うがねえ。芝を駆けるウマ娘という最高の素材より観客席でただ光っているだけのウマ娘の方が気になるなんて、全く。ここに何をしに来ているんだか」

呆れたように、やれやれと首を横に振るアグネスタキオン。

本気で、悪いのは気にする人の方だと思っっているらしい。理不尽すぎる。

「……………まあ、そんなわけで君のレースをちゃんと皆に見てもらえるよう、とりあえずの応急処置だけど被せたんだ。君はこっちは気にせず、全力で楽しんできてくれ」

しかし、マンハッタンカフェは微動だにせず、アグネスタキオンを見つめている。

「おいおい、カフェ。流石の私もそんな風に見られたら気になるんだが……………おい、カフェ？ ……カフェー？」

アグネスタキオンの呼びかけは無視して、一度目をつむつたマンハッタンカフェが俺の方を向く。

その表情は笑顔だ。なのになぜか、こんなどこかで聞いた一節が脳裏をよぎつた。

『笑うという行為は本来攻撃的なものであり、獣が牙を剥く行為が原点である』

「……………。トレーナーさん、私は今、深く傷ついています」

「えっ、何かあったのか……………？」

まさか、通路で誰かに何か言われたとか？ それとも、心無いファンの言葉でもネットか何かで見てしまったとか？

レース直前のマンハッタンカフェの言葉に動揺する。

「それも、トレーナーさんの不用意な行動のせい、です……」
俺のせいだった！

しかし心当たりは全くない。

「気にしないでください。トレーナーさんは何も悪いことはしてないんです。ただ、私が勝手に気にしているだけなんですから……」
「で、でも俺が何かしてしまっただつたら……言ってくれたら直すよ」

「いえ、それはトレーナーさんのいいところでもありませんから……でも、そうですね。では、私の手を握ってくださいませんか？ 思いのほか、緊張してしまって」

マンハッタンカフェが差し出してきた手は、よく見れば小さく震えている。

そうか、流石の彼女もデビュー戦の空気には思うことがあったのか。

それくらいお安い御用だと、マンハッタンカフェの手を握ろうと俺も手を差し出す。

「お、おいトレーナーさん。そいつはそんな気弱タマじゃ——」

ギロツ

「ッ!?!」

？ 今アニマルポッケが何か言いかけたような……しかし何も言わないし、気のせいか。

改めて手を差し出し、マンハッタンカフェの震える小さな手を握った。

あれ、震えて——ない？

グイッ

「うわあ!?!」

掴んだ手をぎゅっと握りしめられ、そのまま勢いよくマンハッタンカフェの側に引き寄せられる。

あわや柵を越えようかというところで、マンハッタンカフェに受け止められて何とか落ちずに半身だけ乗り出すような体勢で落ち着いた。

「お、おいマンハッタンカフェ。いきなり何を——」

「ふふ……いけないうレーナーさんです。レースの前にこんな気持ちにさせて。掛かってしまったら、どうするんですか？」

息がかかるほど近い距離で、マンハッタンカフェが囁くように語り掛ける。

なぜか顔は紅潮しており、これは誰がどう見ても既に掛かっているだろう。

「気持ちを落ち着かせるためです。仕方ないですよね……」
仕方なくない！

だが、三度目となれば次の展開は流石に読めている。こんなこともあるうかと、俺のジャケットにはスルメを入れてあるんだ。

君の噛み癖対策はバッチリ——しまった！ ジャケットは今、アグネスタキオンの頭に！

「アグネスタキオン！ そのジャケットからスルメを取ってくれ！ 手遅れになる前に早く！」

「はあ、スルメ？ トレーナー君、そんなものあるわけ……何で入ってるんだ……？」

怪訝そうな顔で、俺のジャケットから取り出したスルメの袋をまじまじと見つめるアグネスタキオン。

時間がないんだ。見てないで早くこっちに！

「ま、待つてくれマンハッタンカフェ！ 流石に人の目が！ ほ、ほらスルメがあるから！ そっちの方が美味しいぞ！」

「待ちません……というか、何でスルメ……？」
そ、そんな！

あ、アニマルポッケ……サスケハナ……。

「謝罪、レース前のウマ娘に手を上げるのはアタシの中の禁則事項だ。後で制裁るから、勘弁してくれや」

「Sorry. 私、死ヌ、嫌デス」

第8話 誰が為に

『さあ、東京レース場、第5R、メイクデビュー戦！ 出走する16人のウマ娘が続々とゲートに収まっていきます！ 実況は私赤坂、解説は細江さんです。細江さん、よろしくお願いします』

『よろしくお願いします』

ゲートには既に半分のウマ娘が収まっている。

ひりひりする首筋を抑えながら、マンハッタンカフェがゲート入りするのを待つ。

「いやあ、まさかこんな衆目に晒された場所であんな大胆なことをするなんてねえ。光る私より、ともすれば目立っていたのでは？ うん？ 君たちの趣味かな？」

揶揄するようなアグネススタキオンの言葉に、苦笑いをする。

「少なくとも、俺の趣味ではないかな……」

『二番人気のマンハッタンカフェ。3枠5番での出走。ゲートに悠然と向かいます！ ゲート入りまでは一番人気でしたが、今は人気を一つ落としてしまいました』

『ゲート入り直前に、少し気性に難がある様子を見せてしまいましたからね。どうやら噛み癖があるようです』

『噛まれていたのはマンハッタンカフェの専属トレーナーだとか』

『噛みつくほどに信頼関係があるのか、はたまた噛まれるほど仲が悪いか。注目ですね』

『女優として様々な作品で活躍を見せているマンハッタンカフェ。つい先日、事務所を通じてトゥインクル・シリーズに集中するため女優活動を縮小することを発表しました。ちなみに私は彼女の主演作『沈黙のキャロット』のファンです。クールなガンアクションが得意なようです』

『それだけ、彼女のレースにかける意気込みが強いということでしょう。本気の挑戦ということで、期待ができますね。私はドラマの

『科捜研のウマ』のゲスト回が好きです。鬼気迫る演技に定評があります』

「それで、『根暗』はどんな作戦で行くんだ？」

隣のアニマルポツケにそう尋ねられた。隠すようなものでもないので、今回の作戦を答える。

「中盤まで脚を溜めて、最後の直線で差す」

「おう。・・・それで？」

「それだけけど」

「おいー!」

「いや、デビュー戦で無意味に策を弄しても。こう言ったらあれだけど、マンハッタンカフェなら素の実力だけで押し切れる。変なことをする意味がないさ」

シンプルイズベストだ。

強気に言い切って見せると、納得したのかアニマルポツケもそういうもんかと前を向いた。

『大外のエビスホーク、今ゲートイン! 各ウマ娘出走準備整いました』

ガシヤコン

『スタート! マンハッタンカフェ、好スタートを切りました!』

「カフェサン! ナイススタート!」

よし、いいぞ。東京レース場の一八〇〇mはスタートからいきなり第2コーナーに突入するから、早めに内を取れたウマ娘に有利なコースだ。

首尾よく内に入ったマンハッタンカフェは、しかし先頭集団で争うことを嫌ってコーナーに突入してすぐ中団に下がる。

『第二コーナーを曲がって最初に飛び出したのは2番サウスアンジー！ 追いかけるように3番サムスパーク、1番ブライアンテンポ、そして8番ホワイトブルームが続く！ まずはここまでで先頭集団を形成！ 好スタートを切ったマンハッタンカフェは下がって中団に控えています！』

『差しが得意なウマ娘ということですからね。序盤は様子見でしょう』

東京レース場の特徴、二度ある坂の一度目を五番手で通過したマンハッタンカフェ。

上り坂でも速度は緩まることなく、力強い足取りで駆け上がり順調にレースを進めている。

『サウスアンジー先頭のまま第三コーナーに突入！ 先頭集団はサウスアンジー筆頭に膠着状態ですが、マンハッタンカフェがここで中団からジワジワと上がって、ホワイトブルームの背後にぴったりついた！』

文字通りジワジワとにじり寄るように、4番目を走るホワイトブルームの後ろに張り付くマンハッタンカフェ。ターフビジョンに映されたホワイトブルームは、まるで怯えたような表情を見せている。

「ホワイトブルームサン、可哀ソ。カフェサンニ後口、ツカレチャイマシタ」

「走行^{ヤリニキ}辛いんだよな、アイツに尾行^{ツカ}れるの。なんっつか、背筋が悪寒^{フルエ}るっつか、陰湿^{ジメツ}としてるっつか」

「視線。確かに、人にはそういうものを感じる感覚があるとは俗説で噂されている。進化の過程からして、野生の名残とするならば理にかなった機能だろう。だが、そこに本来ジメツとだとか感触のような

ものが介在する余地はない。だというのに、カフェと走ったウマ娘たちは口を揃えてまとわりつくようなという感覚や寒気とかそう言ったものを訴える。実に興味深いねえ。我々ウマ娘には、人以上の何かを感じる第六感があるのか、はたまたカフェの視線に、ウマ娘の神経を触るような特別な触覚のようなものが備わっているのか……」

俺にはわからないが、ウマ娘はマンハッタンカフェから何か威圧感とか凄みのようなものを感じ取っている、ということだろうか。

……いや、そういえば俺も、マンハッタンカフェの視線を背中を感じながら過ごしていた時があつた。

あの感覚をレース中相手に与えられるなら、それは一つの武器になるかもしれないな。

このアイデアはマンハッタンカフェとのトレーニングで活かせるかもしれないから、心に留めておこう。

ホワイトブルームがやや失速し、逃げるサウスアンジーとの距離が開きだす。

マンハッタンカフェもそれに身を任せるように少し下がるが、それでも先頭との差は三バ身程度。運びとしては上々だろう。

『さあ、いよいよ第四コーナーカーブ！ サウスアンジー、先頭のまま抜け出し、意気揚々と最後の直線へと駆けてゆく！ このまま逃げ切るか！ 後続が捕まえるか！ 東京レース場ラストに構える坂へと駆けていきますー！』

坂を上り切れば、あとは一直線。東京レース場の最終直線は五二五mと長丁場だ。

脚を溜めて坂を越えたものが一気呵成に爆発的な末脚でごぼう抜きを見せることもあり、先頭集団でも最後まで気が抜けない。

全ては、この坂をどう登るか、だ。

『ああつと、ここまで先頭をキープしていたサウスアンジー苦しい！ 必死に坂を駆けあがるが、サムスパークとの間に開いていたリ―

ドはどんどんなくなっていく！ 13番コンドクールもここが勝負所と坂を駆け上がる！ 先行集団の中でブライアンテンポとホワイトブルームは失速、ここまでか！』

『しかし、坂を上がり切った後こそが本当の勝負です。ここで脚を全て使ってしまうと直線で苦しいですよ』

勝負慣れしてないが故か。

少し掛かり気味に見えるウマ娘たちが、ペース配分など欠片も頭はないかのように必死にズンズンと坂を登っていく。

マンハッタンカフェは……ピッチ気味に脚を回転させているが、足取りは軽い。よし、周りの熱に浮かされず冷静にレースを見れている。

ペースに囚われず、作戦通り直線勝負する体勢だ。

そして、勝負は最終直線へ。



坂を登り切り、眼前を見据える。

私に先行して既に坂を登り、ゴール板を目指してラストスパートを掛けているウマ娘は5人。

だが、坂で力を使い果たしたのであろう、どんどん速度が落ちていくウマ娘がいるのも見て取れる。

先頭まではおおよそ……5馬身といったところでしょうか。

「……行きます！」

力強く芝を蹴り、五二五mの直線を駆け抜ける。

『マンハッタンカフェ、スパート！ 追いかけるように、坂を登り切ったマイネルリードも続く！』

一人、二人。垂れてきたウマ娘たちを横目に、位置取りを上げてい

く。

——つま先で抉るように踏み抜き、

——踏み出す脚に力を籠め、

脚を爆発させる——！

『マンハツタンカフェ更に加速！ あの坂を越えてまだこんな脚を残してた！ 後続を突き放し、前方へ食らいつく！』

『出走ウマ娘の中では頭一つ抜けていますね』

逃げ続けていたサウスアンジーさんのスタミナが尽きたのか。

とうとう先頭を走り続けていた彼女が、後ろから加速をしていたコンドクールさんに追い抜かれる。

そして、私に追い抜かれる。

あと一人。

『サウスアンジーここまで！ 先頭はコンドクールに入れ替わった！ だが、内を突くように黒い影！ マンハツタンカフェがグングンと順位を上げていく！ 大外からマイネルリード！ マイネルリードも突っ込んできた！ 前二頭とはまだ差があります！ 追いつけるのか!?!』

残り二〇〇m、今の私は二番手。

しかし、外から必死の形相で追いつけてくるウマ娘の姿を、少し後ろに向けた目尻に捉える。

やはりトウインクル・シリーズはレベルが高い。メイクデビューであっても、気を抜くことはできない。

でも、負ける気はしない。

トレーナーさんの前では落ち着きをアピールしてみたが、恥ずかしいことに今更になってデビューにあてられたのだろうか。何だか、体が普段より軽い。脚に熱が宿る。

まだ行け——っ!?

◆
！今……………。

『マンハッタンカフェかわした！ コンドクールをかわし、並ばない！ ゴールイン！ マンハッタンカフェ、ゴール直前見事に差し切りましたー！』

ゴール板をクビ差で一着で駆け抜けたマンハッタンカフェに、客席から大きな声援が飛ぶ。

「カフェサン、Congratulation！ スゴイ！」

「いいぞオ『根暗』ア！ よくやった！」

「ふーむ？ 最後のスパート、今のカフェの実力ならもう一伸びすると思ったんだが……………見込み違い？ いや、私の計算に狂いが？ ならノイズの元は……………」

「おら『マッド』！ なに独り言ブツクサ言つてんだ！」

「うわあ!! 検証の邪魔をしないでくれたまえよ！ 君は本当にガサツでデリカシーがないねえ！」

……………
観客に向かって笑顔で手を振るマンハッタンカフェの姿を見つめる。

その表情、動きに違和感を覚え、疑念が嫌でも補強される。

「？ ドウカシマシタ、トレーナーサン？ 顔、チョット、怖イデスヨ？」

「……………いや……………すまん、ちよつと席を外す！」

杞憂であつてくれればそれでいい。

だが、一度こびりついた妄想が脳を離れず居ても立つても居られない。

盛り上がる人の海をかき分け、スタンドの出入り口目指して走る。

「アツ、トレーナーサン！」

いつまでもここにいたら、取材に来たマスコミたちに捕まってしまう可能性が高い。

マンハッタンカフェの隣に寄り添い、不測の事態に備えながら控室へと向かった。

◇

「っ痛」

椅子に腰かけさせたマンハッタンカフェがシューズを脱いで、こちらにタイツに包まれた脚をおずおずと伸ばす。

かかを抱えるように触ると、マンハッタンカフェの端正な顔が痛みに歪んだ。

「・・・・・・・・かなり腫れてるな。いつからだ？」

タイツの上からでもわかる腫れ。このケガは急いで医者に見せるべきだろう。

「・・・・・・・・ゴールの直前、コンドクールさんを差した時です」

「やっぱりか・・・・・・・・何で、あんな何でもない風を装ったんだ？」

そんな状態で差し切れるマンハッタンカフェも凄いが、それでも痛みはすぐにも知らせるべきだっただろう。

マンハッタンカフェはなぜ、脚の怪我をあの場合で隠したんだ？

「・・・・・・・・私にも聞かせてください。トレーナーさんは、どうして気づいたんですか？ 自慢をするつもりはありませんが、私の演技は完璧でした。周囲どころか脚自分や表情筋自分も騙し切っていたのですから」

「完璧すぎて君らしくなかったからね。動きも、笑顔も。それに、君の走りが一番見ているのは俺なんだ。流石に走りの違和感くらいは気づけるさ」

患部の容態を注視しながら、声だけでマンハッタンカフェの疑問に返す。

「トレーナーさん・・・・・・・・やはり貴方だけが私を——」

「あとアグネスタキオンも違和感を覚えてたみたいだったよ。彼女

の観察眼は凄いな。マンハッタンカフェにはいい友達がいるな」

脚を刺激しないようにゆっくりと台にするために重ねたタオルの上に降ろし、友人の凄さをたたえながら彼女の表情を伺う。

「……………」

あれ、急に機嫌が悪くなった。わかりやすくムスツとしている。

やっぱり年頃の女の子、男の俺に脚を触られるのに抵抗があったのかな。しかし、状況を把握するための触診だ。すまないが我慢してくれ。

「ともあれ、この脚ではウイニングライブは無理だな。運営に申し入れて、その後すぐタクシーを呼んで病院に——」

「嫌です」

思いもしなかった拒絶の言葉に、一瞬反応が遅れる。

「……………マンハッタンカフェ。」

「ウイニングライブはやりませ……………やらせて下さい」

「どうして……………確かに、ファンに伝えるウイニングライブは大事な行事だ。でも、事情を説明すればきつと皆わかってくれるさ」しかし、マンハッタンカフェは首を横に振る。

「違います……………トレーナーさんに、見てもらいたいです」俺に？

「マンハッタンカフェ、俺たちのトウインクル・シリーズはここからずっと続くんだ。今日が無理でも、ウイニングライブは次の楽しみにさせてもらうよ。君ならきつと、センターで踊る姿を見せてくれるって信じてる」

確かにウイニングライブを見れないのは少し残念だが、マンハッタンカフェには代えられない。

そう伝えたかったのだが、それはマンハッタンカフェの意に沿う答えではなかった。

「でもトレーナーさんの、初めての担当ウマ娘の、初めての勝利レースの、初めてのウイニングライブは、今日、今、この時だけです。次はありません。私だけが、その思い出を作れるんです」

そうして、絞り出すような声でマンハッタンカフェが深々と頭を下

げた。

「お願いです……。私を……貴方の記憶の中の私を、初勝利のウイニングライブを見せられなかった情けないウマ娘にしないでください」

縋りつくようなマンハッタンカフェの思いつめた表情に息を呑む。彼女は本気だ。

もちろん、俺はそんなことで彼女を情けないなんて決して思わない。

しかし、担当ウマ娘が心から望んでいることを、トレーナーの俺が否定していいのか。

常識で考えれば、この脚の彼女を病院に連れて行かないことこそがトレーナー失格だ。糾弾されるべき行いだ。

だが、心からマンハッタンカフェのしたいことを、常識を盾に否定する。それは、本当にトレーナーとして『正しい』のか。

俺がやるべきこと……俺がしたいことは……。

「……………」

「……………」

「……………ハア」

どれくらい時間がたったのか。一分かもしれないし、一時間かもしれない。

永遠のような沈黙を破ったのは、俺の溜息だった。

「——っ、トレーナー、さん」

「俺の言うことを、ちゃんと聞いてくれるなら、ウイニングライブをやっている……守ってくれるか？」

ああ、俺は『トレセン学園』のトレーナー失格だ。

でも……………。

「っ、は、はい。必ず、何でも守ります……………！」

この子の笑顔を守れるなら、『マンハッタンカフェ』のトレーナーとしては、これが一番正しいことなのだろう。

よし、やるべきことが決まったなら、あとはそこに向かって全力投球するだけだ。

「まず脚をテーピングで固定する。一曲持たせるくらいならできるはずだ」

備え付けの救急箱を棚から持ってきて、中からテーピングを取り出す。

「よし、テーピングをするからそのタイツを脱いでくれ」

「……………あの」

「流石にタイツの上からだど丸わかりだからな。テーピングをして、その上からソックスを履いて覆い隠す。ライブの時間は夕方だから多少ごわついても気づかれないうらう」

「……………はい、それは。あの、でも」

一向にタイツを脱がないマンハッタンカフェ。

素足を見せるのに抵抗があるのだろうか。

しかし、恥ずかしがっている場合ではない。心を鬼にして、マンハッタンカフェに急ぎタイツを脱ぐよう説得を試みる。

「さあ、マンハッタンカフェ。早く脱ぐんだ。大丈夫、これは治療行為だ。やましい気持ちは全くない」

「タイツは、体操服の下に履いているので、その……………まずズボンを脱がないと、タイツを脱げないのですが……………なので、トレーナーさん。できれば……………」

パンツ！

俯いて頬に朱を差したマンハッタンカフェの羞恥の訴えを最後まで聞くことなく、俺は勢いよく控室を飛び出した。

◇

「よしっ、これで大丈夫なはずだ。どうだ、マンハッタンカフェ」

額の汗を拭う。

タイツを脱いでもらったら割れた爪も出てきて焦ったが、テーピングと共にこちらの補強もできたので大丈夫だと思う。

爪に気づかず何も処置をしないまま立たせていたらと思うとぞつとしないな。

「凄いな……足を地につけても、爪も足首も痛みを感じません」
立ち上がったマンハッタンカフェに部屋を数周させてみて、感触を確かめる。

「あくまで応急処置だから、走ったり激しい動きには多分耐えられないけどね。とりあえず、これでライブをしても患部への衝撃も多少はカバーできるはずだ」

「ありがとうございます、トレーナーさん」

「そして、もう一つ。ウイニングライブの曲を変更する」

俺の提案にマンハッタンカフェが首をかしげる。

「でも、私は『Make debut!』の振付しか練習していませんよ?」

ウイニングライブには特定のシチュエーション、レースにおけるお約束の曲がある。

例えば、今マンハッタンカフェが名前を挙げた『Make debut!』は、デビュー戦及び未勝利戦のウイニングライブにおける定番曲だ。

他にも、クラシック三冠レースでのみ歌うことを許される荣誉あるライブソング『winning the soul』。短距離レースを盛り上げる『本能スピード』など、その種類は多岐に渡る。

だが、『winning the soul』を歌うことが義務付けられたクラシック三冠のように格式高いGIレースとは違い、実はほとんどのレースにおけるウイニングライブの選曲というのは意外と融通が利く。

定番曲というのは、レースに集中するためにウイニングライブの練習を負担をかけず効率的に行うための、ウマ娘への配慮の側面が大きいのだ。

だから、きちんとこなす自信さえあるのなら、ウマ娘が望めばデビュー戦であっても選曲はこちらの判断で変えられる。

メイクデビューが続いたレースの日に怒涛の『Make debut!』エンドレスメドレーを聴かされるのは観客としてもどうなんだというところで、これはむしろ好意的に受け取られるため、歌自慢ダンス自慢のウマ娘は自分の十八番曲を引っ提げてレースに臨むことも多い。

「ああ、一度もダンスレッスンはしていない曲だ。でも、むしろだからこそ今の状況においてはそれがいい。この曲はダンスをせず、立ち姿と歌で観客を魅了する曲だ。脚に負担を掛けない意味でも最適だと思うし、歌そのものの練習は『Make debut!』に並行してやっていたからな。それに……」

「それに……?」

「こう言ったら怒られるかもしれないけど、俺、『Make debut!』よりどっちかと言えばこっちの曲の方が好きなんだ。だから、この曲をカフェが歌ってくれたら、俺にとっては思い出に残る最高の初ウイニングライブになる……なんてな」

最後に冗談めかしつつ、この曲を選んだ理由を伝えた。

マンハッタンカフェも、『Make debut!』を歌うことそのものに拘っていたわけではないので、素直に受け入れてくれたらしい。

「トレーナーさん……ふふ、^{オーダー}指令、了解しました。きつとト

レーナーさんを魅了して見せますから、眼を離さないで下さいね」

「ああ、最前列で応援してるよ」



「おいトレーナーさん、一体何してたんだよ! もう祝勝会^{ウイニングライブ}開催^{ハジマ}んぞ! オラ七色^{サイ}色彩^{イリ}発光^{ウツ}棒^ム持っつけ! お前の担当の大舞台^{ライブ}にお前が振らねえでどうすんだっ」

「すまんすまん、マンハッタンカフェをウイニングライブの打ち合

わせしてたんだ。場所取りありがとう」

レースが終わって数時間経ってやつと戻ってきた俺の姿に、アニメルポツケが青筋を浮かべながらサイリウムを投げつけてきたのでキヤッチする。いい子だ。

「カフエサン、何かアリマシタ？ トラブル、デス？」

不安げなサスケハナに、何でもないと努めて明るく返事をする。彼女たちは、純粹にマンハッタンカフェの応援のために来てくれているんだ。少なくとも今この時だけは、いらぬ不安や心配は抱えないうで、純粹にマンハッタンカフェのウイニングライブを楽しんでほしい。

「.....ふむ、まあ、今はそういうことにしておこうか。おい、誰でもいいから私にもサイリウムをおくれよ。着の身着のまま拉致されたから、私も持ってないんだよ」

やはり、アグネスタキオンは何かに気づいているのだろう。しかし、深くは突っ込まないでいてくれたようだ。

あとで皆にはきちんと話すつもりだから、今は聞かないでくれて助かる。

「.....いや、お前には無用イラネエだろ。全身蛍光ブルーの七色色彩発光棒ウマ娘状態じゃねエか」

日が暮れた夕闇の会場に、青く輝くウマ娘が一人。

みんながサイリウムをつけているからそこまで注目はされていないが、ヒソヒソと何であるの子発光してるのと噂している人たちも見える。

「えー！ 私もサイリウム使いたいよ!? ライブを観戦するに当たっての人とウマ娘の精神的感応の差やホルモン分泌のデータの比較検証ができないじゃないか！」

「振りたきや首振りヘッドバンでもしてろ」

「おいおい、私の頭部には君とは違って英知の源である脳が詰まっているんだよ。無意味に振り回してどんな悪影響があるやらわかったものじゃないだろう?」

ブチイ!

「テメエ喧嘩売ってんのか!? 上等だ! 外オモテでろやゴラア!」
「わー! ストップストップ! サイリウムなら俺が持つてきたの
あるから!」

何とかサスケハナと二人がかりでアニマルポツケを制止し、間一髪
大乱闘を回避する。

マンハッタンカフェのウイニングライブをこんなしようもないこ
とでファイにされたら、さっきまでの覚悟とかが一体何だったんだすぎ
るぞ!

自分が引き起こしかけた惨事など興味がないとばかりののんきな
顔で、わーいとサイリウムを光らせてフリフリしているアグネスタキ
オンに脱力していると、開演のブザーが会場に響く。

『さあ皆様お待ちせしました! 続いては、本日見事メイクデ
ビュー戦勝利を飾りましたマンハッタンカフェによるウイニングラ
イブです! 皆さま、お手元にサイリウムをご用意の上、彼女に精一
杯の応援をお願いします!』

ワアアアアアア!!

歓声とともに、舞台の上のマンハッタンカフェがスポットライトに
照らされる。

ライブ衣装に着替えたマンハッタンカフェが一步、前に出る。
瞬間、誰に言われたでもなく静まる客席。

マンハッタンカフェは一瞬で、客席のボルテージを自分の意のまま
に制して見せた。

「ほう……」

「っ、偉大パネエ……」

「カフェサン、綺麗……」

静寂の場内に流れ始めるイントロ。

観客がゆったりとサイリウムを左右に振り出したのを見守りなが
ら、スツとマイクを構え、マンハッタンカフェの口から歌詞が紡がれ
る。

その曲の名は——『楽園』。

マンハッタンカフェと俺の、目指す先へ。

旅路の前奏曲プレリュードに相応しいその曲は、しかし険しく困難な未来の道のりを暗示するかのように、波乱の幕開けを飾り付けたのだった。

第9話 光明

マンハッタンカフェの怪我は、検査の結果大事に至るものではなかった。

爪のヒビは幸い肉までには至らず、腫れについても骨は無事で関節部分に瞬間的に負荷がかかったことによる炎症。数日安静にすれば腫れも引くということだったので、痛み止めと抗生物質を処方される程度で済んだ。

しかし、怪我そのものではなく、その原因について、俺は頭を悩ませることになる。

◇

「マンハッタンカフェさんの爪は、一般的なウマ娘のそれよりかなり薄いですね。そして、脚の骨もかなり細いです。結果、本格化したウマ娘のパワーを上手く分散して支えきることができず、地面を蹴る薄い爪先へ圧力がかかり、耐え切ることができず割れてしまった。そして、割れた爪を痛みから庇いながら走り続けたことで関節への負担も異常な方向になってしまい、炎症を起こしたのだと思われれます」

「先生、それはどうすれば今後防げるのでしょうか」

マンハッタンカフェの当然の疑問に、診断をした医師が、マンハッタンカフェのレントゲン写真を見ながら難しい顔をしながら答える。

「私はレースの専門家ではありませんので、あくまで医者目線での答えになります。それを念頭に聞いていただくなら、防ぐ方法はありません」

「えっ」

医師の答えに、マンハッタンカフェが目を見開く。

「激しいレースになればなるほど爪への負担は高くなるでしょう。ただ走るだけ、歩くだけなら問題はありませんが、貴女の爪はレースの走りに耐えられる強さを持っていません」

「い、いや先生、でも待つてください。マンハッタンカフェはこれま

でも学内レースでも走っていたんですよ。それが何で急に」

確かに爪は薄いのかもれないが、彼女はこれまでその爪のままです。トラブルなくトレセン学園で過ごし、選抜レースでも見事な走りをしてきたのだ。

彼女の爪がレースに耐えられないなら、もつと前から爪に異常が起きていたはずではないか。

「ウマ娘がレースに出る前提となる『本格化』。これは、ウマ娘の肉体の成長がその子の持つ能力に追いつくことで、本来の力を発揮できるようになること。それはご存じですね?」

「ええ」

例えるなら、ウマ娘の能力は高性能エンジン。

ウマ娘の肉体はそれを乗せる自動車と言ったところだろうか。

エンジンがどれだけ立派でも、それに見合う車体がなければパフォーマンスは発揮できない。車体が耐えられず故障してしまう危険もある。

だから、ウマ娘は本能で、自身の肉体が内に秘めたエンジンに見合う成長を遂げるまで、無意識のうちにスピードを抑制した走りをすると言われている。

そして、内と外、エンジンと車体の折り合いがついたその時こそ、競争ウマ娘としての本当のスタートが始まる。それが『本格化』だ。

「マンハッタンカフェさんの身体は、『本格化』するまでは能力が十分に発揮されてないが故、限界を超えることなくその身に走りの負担を受け止められた。ですが、マンハッタンカフェさんが自分の持つ本来の力を発揮したことで、身体の弱い箇所が『本格化』したウマ娘のパワーを支えられなくなった、そう考えられます」

医師の淡々とした語りに、俺もマンハッタンカフェも沈黙する。

レースに挑むために必須の『本格化』。

その『本格化』こそが、マンハッタンカフェを蝕む病理そのものであると宣告された。

それは、トウインクル・シリーズに挑むという行為そのものを拒む壁にも思えた。



「……なるほどね、それでそんな荒れてるってわけか。初勝
利おめでどうなんて言ってる場合じゃなさそうだな」

その日の夜、言葉数少なくなったマンハッタンカフェを寮まで送り
届けた俺は、沖野トレーナーと行きつけのバーで飲んでいた。

酒を飲んでいる場合じゃないと自分でもわかっているが、飲んで酔
わなきゃやってられない心地だった。

一番苦しんでいるのはマンハッタンカフェ本人なのに、情けない限
りだ。

「すいません沖野トレーナー……こんな愚痴に付き合わせて
しまつて」

「気にすんな。男同士、酒の席でしか吐き出せないものもあるから
な。それに、担当ウマ娘の怪我つてのは、こんな仕事をしてればいつ
かは必ずブチ当たる壁だ。お前さんの場合はそれがたまたま一人目
の一戦目だったってだけでな」

グイッとロックグラスを傾け酒を煽った沖野トレーナー。

カラン、と氷とグラスのぶつかる音が、静かな店内に響く。

「俺たちはトレーナーなんて偉そうな肩書は持つてるけどさ、走る
リスクを背負^{しょ}ってるのは全部ウマ娘の方だ。あいつらが苦しんでい
る時も、俺たちはそれと全く同じ苦しみを味わってるなんて言葉は口
が裂けても言えやしねえ」

沖野トレーナーの言葉には、経験に裏打ちされた重みがある。

彼が率いるチームスピカ。学内トップクラスの優勝の集うチーム
とえば輝かしいが、必ずしもその道のりの全てが順風満帆だったわ
けではないのだろう。

サイレンススズカ

トウカイテイオー

メジロマツクイーン

現在スピカに所属しているメンバーだけでも、三人ものウマ娘が絶望的な怪我、病気に一度見舞われているのは有名な話だ。

それに、それよりもっと前にも何かがあったのだと、先輩である東条トレーナーとの会話の節々から感じ取ったことがある。

「だからな。俺たちにできることなんてのは、怪我のたびにあたふたすることじゃなくて、最後まで諦めることなくどっしり構えてることだ」

「どっしり構える……」

「諦めるのも苦しむのも俺たちの仕事じゃない。ウマ娘の走りへの熱意が消えない限りそれを支えてやって、ウマ娘の熱意が消えそうになった時には、まだ諦めてない俺たちの熱であいつらの心の火をまた燃やしてやるんだ。ウマ娘より先に俺たちが諦めちまったら、そんなことできないだろ？」

なーんて、クサクかったか？

照れくさそうに笑って、誤魔化すようにまた酒を煽る沖野トレーナー。

「ま、それでももうどうしようもなくなった時には、あいつらが笑って次の道を進めるように手を尽くすのも仕事ではあるけどな。だが、お前さんとこのマンハッタンカフェはそう簡単に諦めるタマでもないだろ？」

「ええ。今日の帰り、別れ際も——」

◇
『トレーナーさん。私はこれくらいで走るのを辞めたりしませんよ……骨が砕け肉が潰れようと、芝に立ち続けます……』

◇
「——って」

「いや、それはそれで怖えな!?!」

ともあれ、俺もマンハッタンカフェも医者に何を言われようが、レースの事は全然諦めていない。

しかし、問題が問題だ。

マンハッタンカフェの脚という体質的な問題を相手に、一体俺は何をやってやれるのか。

その答えが見えず、悩み続け、こうして酒の席に一時逃げてきた次第である。

「薄い爪、細い骨、ねえ……爪はどうすりゃいいのか俺もすぐには答えられないが、骨の方なら少しは助けられるかもしれないな」

「えっ、本当ですか!? どうすれば!? 教えてください沖野トレーナー!」

勢いよく立ち上がり沖野トレーナーに詰め寄る。

今の俺は目の前にぶら下げられた餌に食いつく鯉だ。少しでも手がかりがあるなら何だつてすがりたい。

「落ちつけ落ちつけ。うちのチームには大層難儀な骨をお持ちの『不屈の帝王様』がいてな。その面倒を見てたから、俺のトレーナー室にそういう本とかあいつのリハビリのデータが溜りに溜まってんだよ。幸いその後に出番はなくて埃被って眠ってるけどな。用意しとくから、明日にでも取りに来いよ」

気軽に言ってくれるが、トウカイテイオーの治療のデータなんてトレーナーであれば皆喉から手が出るほど欲しい貴重なデータだ。

そんなものを俺なんかに見せてくれるなんて。

俺は酒が入ってるのもあり、感動に思わず目が潤む。

「沖野トレーナー……ありがとうございます! 何てお礼を言ったらいいか……俺にできることが合ったらいつでも何でも言ってください! 何でもしますよ!」

俺の言葉に、沖野トレーナーの目がキラッと光る。

「ん? 何でも? マジで?」

「はい!」

そうかそうか。そう言いながらフツと不敵に笑みを浮かべ、懐に手

をやる沖野トレーナー。

その姿に一瞬ドキリとする。

うっかり口を滑らせて『何でも』とか言ってしまったが、もしやとんでもないことを頼まれるのでは。

ゴクリと息を呑み、懐に突っ込まれたその手が出てくるのを待つ。

スツ

その手にあるのは薄っぺらい財布。

沖野トレーナーの手によって、逆さにひっくり返された財布からチャリンと小銭が飛び出した。

「それなら——今日、金貸してくんない？」

「はは．．．．．沖野トレーナー、喜んで奢りますよ」

相変わらず締まらない人だなあ。

◇

ということ、翌日。

マンハッタンカフェには怪我が治るまではトレーニング休養を指示したので、俺一人で沖野トレーナーのトレーナー室に向かう予定だった。

しかし、現在俺の横には、

「トレーナーさん、どうされました？ スピカのトレーナーさんのところに行くんですよね？」

「あ、ああ．．．．．あの、何でマンハッタンカフェがここに？ 今日休みて言ったような」

制服姿のマンハッタンカフェが俺の顔を上目遣いで覗き込んでいる。

というかそもそも、マンハッタンカフェには昨日のバーでのことは話してないんだけど。

仮に沖野トレーナーのくれた資料でも解決策がすぐに見つかるとは限らない。ぬか喜びさせないために、俺の中で何か一つでも答えが

見えるところまでは黙っていたと思うけど。

「ええ……ですの、お休みをトレーナーさんと一緒に過ごすかと」

「自由時間なんだし、怪我に響かない程度なら友達と遊んできていいんだぞ?」

俺の提案にマンハッタンカフェは顔を曇らせる。

「……トレーナーさんは、私がいるとご迷惑ですか?」

「いや、別にそんなことはないけど」

「ふふ、ではご一緒させてください」

まあ、本人がいいなら俺がとやかく言うことでもないか。

何か解決の糸口を自分でも探してないと落ち着かなくて、遊びどころでもないだろう。

「それで、俺が沖野トレーナーに用があるってどこで知ったんだ?」

「それなのですが、スピカのトレーナーさんから伝言を預かっています。『資料は用意したけどトレーニングが長引きそうだから、すぐ欲しいならコースまで取りに来てくれ』とのことですよ」

「ああ、そういうことか。ありがとうございます。それじゃコースに向かうか」

「はい……あっ」

フラッとマンハッタンカフェがよろめく。

慌ててマンハッタンカフェの腰を手で支え、脚に負荷がいかないように支える。

「お、おい大丈夫かマンハッタンカフェ!」

「え、ええ……ありがとうございます。トレーナーさん」

やはり、レースの疲れと怪我の影響が強いのだろう。医者の話では歩行に支障が出るほどの怪我ではないということだったが、そんなことはなかったようだ。

「マンハッタンカフェ、やっぱり今日は寮で休んでの方が……」

「でも、トレーナーさんは私のために、スピカのトレーナーさんに何かをお願いしたんですよね? ……それなら、私もその場にいたいんです。我がままなのはわかっていますが……」

うーん、無理はさせたくないんだが。

「……………私にいい考えがあります」
「え？」

◇

「お前……………」
キャンディーを啜えながら、呆れたような目で俺を見る沖野トレーナー。

「違うんです沖野トレーナー！ これはマンハッタンカフェの脚を痛めないようにしかたなくですね！ 決して俺が強いているとかそういうのではなく！」

「まだ何も言っただけよ……………」

俺の腕に腕を絡め、しなだれかかるように身を寄せるマンハッタンカフェ。

ここまで来る途中に何人ものウマ娘に冷やかされた影響で、沖野トレーナーの視線に耐え切れず言い訳をしてしまう。

「どうかそいつ、さつき俺と会ったときは何事もなく普通に歩いてたような……………」

「えっ」

ギロツ

「——気もしたけど気のせいだったわ！ いやあ、脚を怪我してるなら仕方ねえなあ！」

なぜか焦って口からキャンディーを落とした沖野トレーナーが、意味不明な動揺を見せる。

誤魔化すようにベンチに駆けていき、紙袋を掴んで戻ってきた。

「ほらよ、これが約束のブツな。とりあえずすぐに出せる資料は全部そこに突っ込んでいたぜ。もし他にも出てきたらまた持つて行つてやるよ」

「沖野トレーナー、ありがとうございます！」

掴んだ袋の持ち手がずっしりと重い。

マンハッタンカフェとこれからもレースを走る未来。それを掴む

ためのヒントがこの中にあると思うと、背筋が伸びる思いだ。

「トレーナーさん、それは一体……?」

首を傾げるマンハッタンカフェ。

そう言えばまだ今日の目的は彼女に伝えてなかったと思い出す。

応えようとしたその時。

「あー!」

コースに響き渡る絶叫。

見れば、トレーニングウェア姿のウマ娘が、こちらを指差し震えている。

その横には、ウマ耳を抑えて震えるウマ娘の姿もあり、その子が叫んだウマ娘に怒りの形相で怒鳴った。

「ちよつとウオツカ!? いきなり叫んでうっさい! トレーニング中にいきなり何よ!」

「いや、だってスカレット! あそこ! あの人!」

ウオツカと呼ばれたウマ娘が指さす先を辿る。その終点は、間違いなくマンハッタンカフェだった。

「知り合い?」

「いえ……」

マンハッタンカフェに聞いてみると、そんな答え。

では、一体あの子はどういう。

「おいウオツカア! トレーニング中だぞ! インターバルの間でも気を抜くな! スカレットはまだコース30周の途中だろ!」

走れ走れ、10周追加!」

沖野トレーナーの檄が飛ぶ。

アンタのせいで私まで怒られたじゃない、馬鹿! という捨て台詞と共に駆けだすスカレットと呼ばれたウマ娘。ウオツカがバツの悪そうな顔をするが、しかし意を決してこちらへと駆け寄ってきた。

「ワライトトレーナー。で、でもよ……何でマンハッタンカフェ先輩がここにいるんだよ!? オレ大ファンなんだぜ!? そんな人がここにいたらトレーニングどころじゃねえって!」

キラキラした目でマンハッタンカフェを見るウオツカ。

その答えに沖野トレーナーが呆れたような顔をする。

「大ファン〜？ マンハッタンカフェは昨日デビューしたばかりのウマ娘だろ？ お前、そんな話したことあったか？」

「ちっげえよ！ いや、レースに興味がないってわけじゃないし、昨日も見に行ったけど……。この人を出てる映画が、オレ超大好きなんだよ！ ま、マンハッタンカフェ先輩！ 『沈黙のキャロット』の超クールなガンアクションに、オレ惚れました！ あ、握手してください！」

バツと90度の角度に腰を折り、手を差し出すウオツカ。その姿に微笑んで、マンハッタンカフェが握手をした。

「ありがとうございます、ウオツカさん……。でしたね」

「は、はい！ ウオツカッス！ うお〜！ 握手してもらっちゃったぜ！ もうこの手は一生洗わねえ！」

子供みtainなことを言っではしゃぐウオツカにマンハッタンカフェが苦笑する。

「いえ、いつでも握手しますので洗ってくださいね」

「マジっすか!? あざっすマンハッタンカフェ先輩！ あ、あとトウインクル・シリーズデビューおめでとうございます！ オレ、昨日見に行きました！ ウイニングライブもカッコよくて、サイコーでした！ 次のレースも見に行きますんで、頑張ってください！」

どうやら、ウオツカという子はマンハッタンカフェの熱心なファンらしい。

女優としてのファンから、競技者としてのファンへ。

マンハッタンカフェのトレーナーとしても、こうして彼女を応援してくれる子を直に見れることは何だか嬉しいものがある。

「お前がマンハッタンカフェのファンなのはよくわかった……。ただどな……。インターバルはもうとつくに終わってんだ！ さっさとトレーニング再開しろ！ 余裕綽々みたいだから今日は思いつきりハードに行くぞウオツカア！」

堪忍袋の緒が切れた沖野トレーナーに、やっべといった表情になったウオツカが逃げの体勢をとる。

「そ、それじゃマンハッタンカフェ先輩、失礼します！ 許してくれよトレーナー！ ちよつと喋っただけじゃねえかー！」

「あつ、逃げんなウオツカ！ 悪い、俺はこれからあいつとつ捕まえなきゃいけないから行くわ。じゃあな……ゴルシイ！ ウオツカ捕まえたらない焼き奢つてやるぞー！」

「マジ!? よっしやあー！ たい焼きを海に放流して川に上るまでを見届けてやるぜえ！ 鉄板からの逃避行に全米が泣いた！」

走り去る沖野トレーナーの横を、セグウェイに乗った葦毛のウマ娘が併走して駆けてゆく。

チームスピカ……嵐のような個性の集まりだ。

俺もマンハッタンカフェも翻弄され、気づけばぼつんと取り残されてしまった。

「……………トレーナー室に帰ろうか」

「……………ええ」

「く、クリームちゃん、急に止まってあつちのほう見てハアハアしだしたけど、どうしたの!? 調子でも悪くなった!?」

「ふひっ……………予想だにしなかったまさかのカフェ様とウオツカお姉様の濃厚接触ツーショット……………たまらないですよ！ ハアハア」

「いやー！ クリームちゃんがキモくなっちゃったよー！」

「ビューちゃん、クリームちゃんはいいつも大体気持ち悪いよ……………」

「!？」

「ん？ どうしたマンハッタンカフェ」

マンハッタンカフェが急に立ち止まった。

「……………一瞬寒気が。気のせいだと思いますが」

「風邪かもしれないな……………早くトレーナー室に戻ろうか。と
りあえず、俺のベストでも肩にかけて冷やささないようにしておこう。
こんなものしかなくてごめんな」

「い、いえ……………ありがとうございます。トレーナーさん……………
心も体も暖かいですよ」



「カフェ様の上目遣いデレいただきましたですう！　ぴゃー！」

「クリームちゃん!?　一体何が見えてるの!?!」

「ビューちゃん、もうクリームちゃんはほっとうよう……………」

第10話 変人記者

「足が前に出すぎだ！ 身体の軸に平行させて下ろすんだ！」
「……………はいっ！」

練習コースの一角、マンハッタンカフェの動作に注目し、修正点を指示する。

一つ修正すれば、そこに連動するかのようにならばまた別の問題点が表れる。

先は長いな。

「すみません、トレーナーさん……………まだうまく感覚が掴めず」「いや、当然のことだ。今まで何年もやってきた走り方を変えるんだからな。気にしないでいい」

寝食を忘れて資料を読み漁ること数日。マンハッタンカフェの怪我が癒えるまでには自分の中でプランを固める必要があった。

結局毎日トレーナー室にやって来るマンハッタンカフェと二人で資料を読みながら、ああでもないこうでもない二人で意見を言い合い、マンハッタンカフェにこれ幸いと怪しい薬を飲ませようと突撃してくるアグネスタキオンを追い返す毎日。

付け焼刃の対策ではだめだ。

マンハッタンカフェの脚は今後もレースを走り続ける脚だ。トゥインクル・シリーズの、数レースだけ走れるようになればいいというものではない。

俺が沖野トレーナーから貰った数々の資料。その中から俺が出した結論は一番先を見据え、最も困難かもしれない方法だった。

『走法の変更』

沖野トレーナーも可能性の一つとして調べ上げ、そして当時のトゥイテイオーの状況には使えないものと断念したものである。

トゥインクル・シリーズを見始めたばかりのファンが最初に驚くことがある。GIレースでウマ娘が着用する勝負服の多くがハイヒー

ルの形を取っていることだ。

人並外れた脚力のウマ娘がハイヒールでどうやって走っているのか。その答えが走法だ。

ウマ娘は爪先から芝を踏み、そのままかかとを地面につけず足先で蹴り上げる所謂『フォアフット走法』を取る子たちが多い。ウマ娘の強靱な腱が可能にするこの走り方は、爪先から接地することで膝や筋肉への衝撃を和らげる。

そして足先で走るからこそ、ハイヒールでもあれだけの走りができるのだ。

マンハッタンカフェも、その例に漏れずにフォアフット走法で前回のレースに臨んでいた。しかし、マンハッタンカフェの爪は彼女の脚力に耐え切れなくなってしまうた。

それは、足先に力を籠めるフォアフット走法の限界を意味する。

関節部分の怪我も全ては爪先に端を発するもの。そこに負担をかけ続ける限り、彼女の脚はいつか本当に壊れてしまうだろう。

ならば、覚悟をしなければいけない。今まで何年も続けてきた走りを捨てても、未来を得るための覚悟を。

沖野トレーナーがこれを選ばなかった理由の一つは多分「時間」だ。慣れ親しんだものを捨てるのだから、会得してから違和感の修正するまでにはとにかく時間が必要だ。

既にクラシックレースの真ただ中に身を置き、しかも大怪我からの復帰のリハビリの最中のトウカイテイオーにそれ以上の負担は背負わせられなかっただろう。

それに、既にG1を取るという偉業を達成していたトウカイテイオーの走りは、ある意味あそこで完成していた。

走法を変えろというのは別に魔法の解決法でも何でもない。

リスクとリターンを考慮した結果、トウカイテイオーにやらせるものではないという結論を出したのだろう。

その点翻って、まず俺とマンハッタンカフェは走法を変えなければ

そもそもこれから先のレースの見通しが立たないという崖っぷちからのスタートだ。

やらなければならぬことならやるしかない。

クラシックレースまでにはまだ時間があるのも幸いし、ジュニア期は雌伏の時期として先の戦いに備えるという結論に俺たちは至った。

マンハッタンカフェに習得させようとしている走り方は『ミッドフット走法』。爪先ではなく足の裏全体で着地し地面を蹴る走り方だ。

爪先以外に負担を分散し、脚全体への衝撃も和らぐこの走り方に俺とマンハッタンカフェは活路を見出した。

そうして、マンハッタンカフェの怪我が治った今日から、早速走り方を変える特訓をスタートしたわけだ。

「よし、少し休憩しようか。初日から飛ばしすぎるのもよくない」
マンハッタンカフェにドリンクを渡し休息を取らせつつ、互いに見ながら、やりながら感じたことを情報共有する。

マンハッタンカフェが感じた些細な感覚も今は貴重な情報だ。

ノートと映像で記録し、後から分析できるよう備える。

すると一息ついたマンハッタンカフェが、何かに気づいた。

「トレーナーさん……あそこの人、私たちを見ているような……」

マンハッタンカフェが言う方を見れば、メモ帳とペンを手に熱心に俺たちを見ている女性がいる。

あれは記者だろうか。

トレーニング中にも関わらず接触しようとしてくる、トウインクル・シリーズにはあまり興味がない芸能記者のような人たちが最近よく現れるので辟易していたが、彼女はウマ娘関係の記者なのだろうか。

トレーニングの邪魔をせず見ていてくれるなら、警戒することもないだろう。

マンハッタンカフェには気にしないよう言って、トレーニングを再

開した。

◇

トレーニング終了後、マンハッタンカフェのクールダウンの間に、練習を最後までずつと見ていた記者の人が近づいてきた。

「申し訳ありません。今、お話よろしいでしょうか？」

「はい、大丈夫ですよ。練習が終わるまで待っていたいてありがとうございます」とうございます」

「いえいえ。トレーニングに励むウマ娘さんとトレーナーさんをお邪魔するにはいきません。何時間でも何日でも、トレーニングが続く限り待ち続けますとも！」

そんなにトレーニングしたら俺たちの方が壊れてしまうが。

よくわからないテンションだが、とりあえず熱い人ではあるようだ。

「あつ、申し遅れました。私、『月刊トウインクル』で記者をしております、『乙名史 悦子』と申します。本日、マンハッタンカフェさんとその担当トレーナーさんに取材をさせていただきたく、お邪魔させていただきました」

頭を下げる乙名史記者。

月刊トウインクルはウマ娘に真剣に向き合った紙面と、専門家顔負けの豊富な知識に裏付けされた内容で、トレセン学園のトレーナーやウマ娘にも愛読者の多い人気雑誌だ。かく言う俺もトレーナーになる前から愛読している。

「早速ですが、マンハッタンカフェさんの本日のトレーニングについてお聞かせ願えますか？ 前回のメイクデビューの後軽い怪我をされたとのことでしたが、それと何か関係が？」

まあ、今日一日まともに走りもせずひたすらフォームのトレーニングをしていたからな。そこが気になるのは当然か。

「はい。マンハッタンカフェと相談し、彼女の脚にあったフォームを身に着けるトレーニングをしていました」

「なるほど。しかし、デビュー後にフォームの特訓とは、あまり聞かないことですね。それはやはり——」

隠し立てすることでもないので、マンハッタンカフェの爪と脚についてかいつまんで話す。

「そうですか……爪の負担を軽減するために。ですが、走法の変更とは思いませんでしたね。変えたばかりに元のように走れず、走法を戻すこともままならない。そんな例も過去にあります」

「確かにリスクは大きいですが、マンハッタンカフェが今後もレースをする上ではこれがベストの選択だと俺が判断しました。彼女ならパフォーマンスを維持できると信じてサポートしていくつもりです」

「……す」

「す、す、す、素晴らしいですっ！」
うわっ！

「マンハッタンカフェさんのために、ありとあらゆる責任を一身に背負い、己の全てを彼女の未来に捧げる覚悟！ 感服しましたっ！」
突然ハイテンションで奇声を上げ、何というかイッた目で虚空を見上げる乙名史記者。

「ただレースに勝つだけでなく、一秒でも長く彼女の走りを守るためにあえて難しい道を行き、そしてそのためなら自分はどうなってもいい！ 火の中の水の中、彼女の栄光を支える礎として骨を埋める決意！ 素晴らしいトレーナー魂です！」

そこまでは言っていないが、どうやら彼女の琴線に触れたらしい。ものすごい勢いでメモ帳に文字が書き込まれていく。

その後も、マンハッタンカフェとの出会いやメイクデビューまでの質問について、俺とマンハッタンカフェの二人で答えた。

いくつかはオフレコでお願いする部分もあったが、乙名史記者はそこは守ってくれると確約をくれたので大丈夫だろう。

「これは是非記事に！ そして、マンハッタンカフェさんとトレーナーさんの行く道を、これからも私に密着取材させていただきたいっ

！　そう感じました！」

この人にこれからも記事にされると、いつか世間の俺への認識がマ
ンハツタンカフェのためなら己の命すら投げ出す狂人になっていき
そうで怖いんだが、しかし、俺たちに友好的な記者の知り合いがで
きるのは心強いものがある。

できる限り記者は味方につけるといふのはこの世界に入ってから
散々色々な人に言われてきたことだ。

苦笑いしながら乙名史記者に了承の意を示し、こちらこそお願いし
ますと頭を下げた。

第1話 休日的一幕

マンハッタンカフェと走法のトレーニングを始めてしばらくたった。

今日は休日。トレーナー室で翌週のトレーニングの準備をしていたところ、いくつか足りないトレーニング用品があるので、ショッピングモールに脚を伸ばそうかと外出の準備をしていた時だった。

P r r r r

着信音とバイブレーションが胸ポケットのスマホを揺らす。

発信元はマンハッタンカフェ。何の用だろうか。

「もしもし。マンハッタンカフェ、どうかしたか？」

『おはようございます。あの、トレーナーさん……今日、お暇でしょうか。よければ、以前お話していたコーヒード豆を買いに行くのにお付き合いただければと』

デビューから今日までバタバタしていたので機会を逃していたが、以前一緒に行こうと約束していたな。

元々出かける予定だったので、もちろんだと返事をする。

「それじゃ、俺はいつでも出れるから美浦寮の前で待つてようか」

「いえ」

返事が右耳に当たったスマホの通話口ではなく、左耳から聞こえてくる。

なんと、いつの間にかマンハッタンカフェが俺の横に立っていた！

「私も準備はできています。行きましようか、トレーナーさん」

「い、いつの間に……?」

「熱心なトレーナーさんも素敵ですが、気配を消しただけでこんな近くにいても気づかないのは考え物ですね……私に悪意が合ったら命はないですよ?」

「ここは気配を消す敵に襲われるような世界じゃないぞ!」

大真面目に恐ろしいことを口にするマンハッタンカフェ。俺は実は彼女に命を狙われたりしているんだろうか。

そもそも気配を消してトレーナーに近づかないでほしい。なんで

そんな特技を持っているのかは知らないが。

「色々するのに便利だと思つて勉強したことがあるんです。レースに出会つて活かす機会もなくなりましたが……」

「……うん！ それじゃ、二人とも準備できてるんだし出かけよう！」

なぜだろう。その色々についてはあまり詳しく聞かない方がいい気がする。とりあえずツツコまないでおこう。

◇

最初に向かったのはショッピングモールのスポーツ用品店。

マンハッタンカフェが先に俺の用事を済ませていいと言つてくれたので、お言葉に甘えて寄らせてもらった。

必要なものを手早く揃えて店を後にする。

新商品もたくさん出ていたのでできれば数時間くらいここにいたかったが、今日はマンハッタンカフェと一緒に。また次の機会にでも、一人で来てゆっくり見て回ろう。

「お待たせマンハッタンカフェ。それじゃ、次はマンハッタンカフェの行きたいところに行こうか」

「はい……よかったですか、トレーナーさん。もう少しゆっくり見て回っても」

「いや、大丈夫。今日は買うものも決まってたからな。それにせつかくオフなのに、君をトレーニングのことに付き合わせるのよな」

「そうですね。私にそんな遠慮はいらないのですが……」

「……そうですね。今日は、トレーナーさんのご厚意に甘えさせていただきます。では、次は私の行きたいお店に行きましょう」

マンハッタンカフェは俺の手を引くと、スポーツ用品店に歩を進める。

「お、おいマンハッタンカフェ？」

「私、今日はトレーニング用品が見たいので、お付き合ひいただけま

すか……トレーナーさん？」

「どうやらいらぬ気遣いだつたらしい。

数か月の付き合いでわかつてきたが、彼女はどうも俺が遠慮するのを嫌う気がある。」

「なら、俺も遠慮はあまりせず、その分彼女のやりたいことにも積極的に付き合つた方がいいのかもしれないな。」

「ありがとう、マンハッタンカフェ。それじゃ、色々見て回ろう」
店内に並べられた商品を手に取り見分して回る。

こうしてトレーニング用品に囲まれていると次から次へのその道具を使ったマンハッタンカフェのトレーニングのアイデアが浮かんでくる。

通販でも買うことができるが、やっぱりウマ娘が使うものはこの目でしっかり見てから買いたいからな。

「あつ、そういえばトレーニングシューズもそろそろ変える時期か。マンハッタンカフェはどのデザインが好みだ？」

「そうですね……やはり黒色がベースなのが第一です。濃いコーヒーのように深い黒色が落ち着きます」

「黒はデザインの幅も広いからいいな。あつこれなんかデザインもクールでマンハッタンカフェに似合いそうだな。それに、クッション性も高性能だし脚への負担も減りそうだ」

「マンハッタンカフェってプロテインの味は何が好きなんだ？ 今はとりあえず買い置きしてたバニラだけど、嫌いだったりしないか？」

「いえ、特に嫌いではないです。でも、プロテインってこんなに色々な味があるんですね……知りませんでした。あつ、コーヒー味まで」

「小分けのパックで色々試せるし買つていこうか。俺もちょっと味が気になるし」

「ん？ なんだこの道具。うおっ、凄い跳ねる！ 跳ねるぞマンハッタンカフェ！」

「それは………一体何に使う器具なんでしょう？」

「体幹を鍛える器具みたいだな。でも、ちよつとウマ娘には物足りなさそうだな………いや、あれと組み合わせれば効果的なトレーニングができるかも。それなら………」

「あつ………トレーナーさん。そんな跳ねながら考え事をする………」

「えっ？ うわあ!？」

二時間ほど店内を見て回り、すっかり満足した俺はホクホク顔で店を出た。

「いやあ、こんな長く悪いなマンハッタンカフェ。ありがとう、満足できたよ」

「いえ………楽しそうにはしゃぐトレーナーさんを見れて、私も楽しかったですから」

スポーツ店で俺を見て楽しいっていうのはよくわからない感想だが、まあ彼女も退屈しなかったならよかった。

「それじゃ改めて、マンハッタンカフェの方の用事に行こうか。このショッピングモールの中なのか？」

「喫茶店は商店街の方です。………ですが、このショッピングモールでも少し服など見たいので、寄ってもよろしいですか？」

「もちろん」

向かいながら聞くと、マンハッタンカフェがよく着ているブランドの店舗が別フロアにあるらしい。イメージキャラクターを務めているんだそうだ。

「私はあまり服にこだわりはないので、ブランドで統一した方が楽なんです。私をイメージキャラクターにするようなブランドなので、好みの色遣いやデザインが多くて悩まなくて済むので………」

「へえ、でもこだわりがないっていうのは意外だなあ。マンハッタンカフェの服、今日もお洒落だし結構その辺意識してるのかと思った

よ」

「今日も、キャスケット帽とサングラスの変装感丸出しのいで立ちでも、それが怪しくなくファッションの一つと思わせるような着こなしだ。」

「そう言っていただけだと嬉しいですね……。これでも一応芸能人の端くれですから。センスがないと思われてしまうと、流石になけなしのプライドでも傷つきますので……。」

嬉しそうに微笑むマンハッタンカフェ。彼女の言うこだわり、とは、俺のように休日でも面倒くさくてスーツで過ごすような輩と一緒に話してはいけない領域での話のようだ。反省。

話しているうちにたどり着いた女性向けの服屋の前で、俺は立ち止まる。

「それじゃ俺はここで待つてるから、ゆっくり見ておいで」
すると、マンハッタンカフェは不思議そうに小首を傾げた。

「……トレーナーさんは一緒に来てくださらないのですか？」
「いやあ、流石に俺みたいなのが入ったら、浮かないか。この店」
外観から、入っていく客層からもう、お洒落な女性以外立ち入り禁止というようなオーラが満ち溢れている店構えだ。入るだけで精神を削られそうなの。

「大丈夫……。私と一緒にいけば、女性の買い物に付き合わされている男性としか思われませんよ。それに、今日はトレーナーさん目線でも服選びを手伝っていただきたいんです。芸能界ではなく、レース競技者としての衣装センスでは私はまだだと思えますから。ほら」

手をグイッと引かれ、店内へと導かれる。人生でこんな店に入ることにになるとは……。

「そ、そうか。わかった。覚悟を決めよう」

だが、マンハッタンカフェに求められているのだ。俺のメンタルダメージについては今は無視しよう。

いざ、戦場へ！

◇

燃え尽きた……。

「ありがとうございました……トレーナーさん。トレーナーさんの意見、とても参考になりましたよ」

「そ、そうか……。それならよかったよ……」

いくら変装しているとは言え、店内のいたるところにマンハッタンカフェがモデルとして写った写真やポスターが貼ってある店内で、あのマンハッタンカフェが気づかれなかったというのは無理があつたらしい。

遠巻きにマンハッタンカフェを見てヒソヒソと会話する女性たちの目が、その後ろで引きつった表情をしている俺に集中するのは当然の流れだった。

一切気にせず、マイペースに服を見ては俺に感想を求めるマンハッタンカフェに気づけながら、四方八方の奇異の目に晒される時間は、控えめに言って恐ろしいものであった。

でも、マンハッタンカフェが喜んでくれたなら俺の精神が削られた甲斐もあつただろう。マンハッタンカフェの胸には、今日買った服の入った紙袋が抱かれている。

やっぱり、隣で歩く機会も多いわけだし、彼女に恥をかかせないためにも俺ももつとこういった分野も磨かないとなあ。

俺の知り合いで一番こういうことに詳しくそうなのは……。有栖川社長か。近況報告も兼ねて、今度連絡してみようかな。

取り留めないことを考えながら、横を歩くマンハッタンカフェにこの後の予定を問いかける。

「どうする？　まだ何か買うものあるなら付き合おうぞ」

「そうですね……。行きたいお店はもうないですが、もう少しここで何か見ていたいですね……。せっかく二人で来ているのですし。トレーナーさん、どこかおすすめのお店などは知ってらっしゃいますか？」

腕時計の示す時間はまだ夕方16時。マンハッタンカフェの行き

つけの喫茶店は夜までやっているそうなので、ここでもう少し時間を潰してから行けば寮の食事の時間にもちょうどいいくらいだろう。

しかし、仮にも高校生の彼女を、保護監督する立場にある余り遅くまで連れまわすのもよくない。

二人で短い時間でも楽しめる店か。

「そうになると・・・あそこかな」

◇

「ゲームセンターですか」

「ああ。ここなら色々楽しめるだろう？ マンハッタンカフェはゲームセンターによく来るのか？」

「いえ、こういつた騒がしいお店はあまり・・・。アニマルポツケさんはお好きみたいで数回はお付き合いましたのですが」

ああ、何かわかる。完全に偏見だけどアニマルポツケは格ゲーとかスロットコーナーにたむろしてそうだ。

「トレーナーさんは？」

「俺も、最近はあるまり来てなかったなあ。それでも、学生時代には友達と学校帰りによく行ってたから、君に色々教えるくらいはできるぞ」

トレーナーを志し、そして夢叶ってからは、そっちの勉強やら何やらですっかりこういうった遊び場からは遠ざかっていた。

それでも、大まかなゲームの種類は昔と大して変わっていない印象だ。マンハッタンカフェをリードして接待するくらいなら何とかかなるだろう。

「マンハッタンカフェ、やりたいゲームとかあるか？」

手持ちの千円札を両替機で崩しながら、興味深そうに周囲を見渡すマンハッタンカフェに尋ねる。

「そうですね・・・では、あれをやってみたいです」

マンハッタンカフェの視線の先にはガンシューティングゲーム。襲い来るゾンビを銃で撃つ、よくあるあれだ。

二人で協力プレイもできるので、経験者の俺は彼女の補助に徹しよう。

「よし。サポートは任せてくれ。君の背中俺が守ってみせるよ……なんてな」

銃型のコントローラーを構えると男心がくすぐられて、ガラにもない映画のワンフレーズのようなセリフが口を突く。

「頼もしいですね。よろしくお願いします、トレーナーさん」

華奢な彼女に不釣り合いな、武骨なコントローラーを抱えたマンハッタンカフェ。

しかしなぜだろう、彼女が銃を構える姿はやけにハマって見えた。

◇

「トレーナーさん……右から来ます。グレネードを撃つのでガードの体勢を」

「お、おう！」

マンハッタンカフェの的確な指示に合わせて画面の中の俺の操作キャラが防御する。

「……今」

冷静沈着に、ブレることない動作から放たれた弾が着弾し、画面内のゾンビを一掃する。

初めてとは思えないほどに落ち着き正確なプレイのマンハッタンカフェは、俺にサポートされるどころか逆に俺をサポートしてみせる余裕を見せ、気づけば俺も到達したこともない最終ステージへとノーコンティニューで到達していた。

「あ、危ないマンハッタンカフェ！」

マンハッタンカフェ側の死角から飛び出てきたゾンビに気づき、そちらへ銃口を向けようと銃を構える。

マンハッタンカフェは俺のサポートで、身体も銃も逆方向だ。ここは俺が！

パンツ！

マンハッタンカフェは顔を向けることすらせず、銃口だけゾンビに合わせ寸分の狂いもない射撃で脳天を打ち抜いてみせる。

そして流れるようなロードの後水平方向に銃を倒し、視界がお留守になった俺に向かってくるゾンビの群れを連射で薙ぎ払った。

「ふう。危なかつたですね、トレーナーさん……大丈夫ですよ。貴方は私を守ります。指一本触れさせません」

うーん、カッコいい。俺が女子だったら確実に惚れている。

「あ、ありがとう……うん」

何と驚くことなかれ。ここまで俺のキャラクターの体力は1ゲージたりとも減っていない。

俺の実力……なわけもなく、マンハッタンカフェの手厚い介護の賜物だ。

経験者とは。接待とは。サポートとは。

俺の少し心のどこかにあった経験者意識はもはや粉々に砕け散ってしまった。

しかし、銃を構えるマンハッタンカフェの姿はどことなく生き生きとしており、彼女がここまで楽しんでくれるならよかつたと思いなおす。

そして何より。

銃を撃つマンハッタンカフェが、女の子にこういうのは何だが、イケメンすぎる……！

男の俺が嫉妬するのが虚しく思えるほどサマになっており、銃を構え、撃つその所作一つ一つがまるで映画から飛び出てきたキャラクターのようだ。

いつの間にかギャラリも集まっており、マンハッタンカフェの一挙手一投足にキヤー！ と黄色い歓声を上げている。

何なら俺もギャラリに混ざりたい。残念ながら俺の腕では目の前の画面のゾンビに対処するだけで脳のキャパシティが限界を迎えるので、横で八面六臂の活躍を見せるマンハッタンカフェの姿をしっかりと見ることが叶わないのだ。

「ラスボスのようですね、トレーナーさん。頑張りましょう。サポートは任せてください」

「頼もしすぎるぞ、マンハッタンカフェ」

そして情けないぞ、俺。

言うまでもなく、ラスボスの攻撃も一度も俺に届くことはなかった。

これ、そういうゲームだったっけ？

◇

「ありがとうございます、トレーナーさん。大切にしますね」

黒い豆に点のような顔のついたぬいぐるみを大事そうに持ったマンハッタンカフェ。コーヒー豆くんとかいうらしい。そのままだ。

俺にもわずかながらも意地があったので、何かいいところ見せねばと挑んだクレイニングゲームで5回のリトライの末にゲットした景品だ。マンハッタンカフェが少し欲しそうにしていたので、取れてよかった。

「喜んでくれてよかったよ………本当に」

マンハッタンカフェが鬼のようにゲームが上手かったのはあくまでガンシューティングだからのようで、その後プレイした音ゲーやレーシングゲームではごく普通の初心者ゲーマーといった姿を見せてくれたので、俺もどうか大人で経験者のプライドを保つことができた。

マンハッタンカフェがゲーム下手な姿を見てプライドを保つてよくよく考えなくても情けなさすぎると思うが、男は恰好つきたいものだから見ないふりをした。

逆に、何であんなにガンシューティングだけ異常に上手かったのか。マンハッタンカフェに聞いてみると、母親にアメリカへ連れて行ってもらった際に銃の使い方を教わったのだそうだ。

実銃の使い方とは違うのでは、とも思ったが現実にスーパープレイを目の前で見せられたので何も言えない。そういうものなのだろう。

「時間もそろそろいい頃合いだな。そろそろ出ようか」

時間を忘れて楽しんでしまった。久々に来てみると、やっぱりゲーションはいいものだ。たまにはトレーニングの息抜きにでも、これからもマンハッタンカフェと来るのもいいかもしれないな。

「あの……トレーナーさん。最後にあれに、一緒に入っていただけませんか？」

マンハッタンカフェが遠慮がちに指さすのはプリクラ。学生時代は男友達とバカ騒ぎしていただけの俺にはほとんど縁のなかった機械だ。

「せっかく取るなら、また今度友達と来たときに撮った方がいいんじゃないか？ 同期の皆とか」

プリクラに興味が出たのはいいが、今撮っても俺とのツーショットしか取れないしな。

「……トレーナーさんは、私と写真を撮るのはお嫌ですか？」

……その言い方は、卑怯だろう。

俺の方からマンハッタンカフェとの写真を厭う理由は何もない。何だかかんだ、そういう写真は担当ウマ娘との絆の印みたいでちよつと憧れもあったしな。

「よし、それじゃ撮るか！ 落書きは任せたぞ、マンハッタンカフェ。自慢じゃないが、俺はそういうセンスは欠片もないからな！」

「！ はい……！ お任せください。影より濃い闇で彩りましょう」

「いや、それはプリクラ的にはどうなんだ。明るくなんか可愛い感じがいいんじゃないか」

「明るく……可愛く……私には、荷が重いですね……」

「はは……それじゃ、二人で色々やってみやるか」

「ええ、そうしましょう……ふふ」

◇

日もすっかり落ち、外灯に照らされた美浦寮の入り口で俺が持っていた彼女の荷物をマンハッタンカフェに手渡す。

「今日は一日ありがとうな。コーヒー豆も、選んでて楽しかったよ。豆って言ってもあんなに種類があるなんて知らなかったな。また色々教えてくれ」

「こちらこそ、ありがとうございました……。今日買った豆は明日からトレーナー室で使いますから、楽しみにしていてくださいね」

マンハッタンカフェに案内された喫茶店を営む老夫婦はマンハッタンカフェととても親しげで、俺にもとても親切にしてくれた。

彼らやマンハッタンカフェの手助けで自分好みの豆を探す体験ができたので、それを飲めるのが今から楽しみだ。

「それじゃ、明日に備えて早めに寝るようにな。一日遊んだから疲れてるだろうし、しっかり休むこと」

「……。トレーナーさんも、まさかとは思いますが、今日はトレーナー室に寄ったりせず、部屋に戻って休んでくださいね?」

俺のこれからの予定を見透かされドキリとする。今日はこの後、買ってきた機材をトレーナー室で色々触るつもりだった。

「はあ……。そもそも今日はオフの日なのに、朝からトレーナー室にいたことも私は少し怒ってるんですよ」

「いや、どうも休みの日って何すればいいのかわからなくて……。やることないならトレーニングのこととか、事務仕事でもやってた方が効率いいかなって」

趣味と言える趣味がないので、俺にとってはウマ娘のことを考えるのが趣味でもあるようなものなのだ。

しかし、その答えはマンハッタンカフェのお気には召さなかったらしい。ジトツとした目で見られ、言葉に窮する。

「……。わかりました。では、来週も私とどこかに行きましよう。それなら仕事はできませんよね?」

ナイスアイデアでしょう。そんな顔で提案される。

しかしマンハッタンカフェの申し出は嬉しいが、それは彼女を拘束

してせっかくの休みでまで俺と顔を突き合わせることになる。彼女の精神的な負荷になると困るのだが。

「……………私も休日は基本的にお仕事だったので、それがアリスさんのご厚意で減ってる今は、トレーナーさんと同じでやることばかりないんです。ですので、私が趣味を探すのを手伝うとも思ってくださいれば……………。休日私と過ごすのは……………。お嫌、でしようか?」

……………だから、その言い方は卑怯だぞ。マンハッタンカフェ。わかってて言っているのだろう。言葉とは裏腹に、上目遣いで俺を覗き込む彼女の瞳は笑っている。

「わかったわかった。休みの日には(できる限り)仕事はしない!

マンハッタンカフェの外出にも付き合う! でも、嫌になったり予定が入ったらすぐ言うんだぞ。無理してほしくないからな」

「もちろんです。それではトレーナーさん、また明日お会いしましょう……………おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

美浦寮の中へと消えていくマンハッタンカフェを見送り、踵を返す。向かう先はトレーナー室——ではなく、トレーナー寮。

流石にこの流れで仕事に向かうほど俺の面の皮は厚くない。

……………マンハッタンカフェの出ている映画でも、ネットで探して見てみるか。

まるで、マンハッタンカフェの瞳のように金色に輝く月に照らされながら、帰途についたのであった。



「お帰りのせエ!……………あんれえ、カフェさん。何だかすつげえ嬉しそうですねえ。何かいいことでもあったんで?」

ルームメイトのユキノビジン——ユキノさんが、部屋に戻った私を元氣よく出迎えてくれる。

私が笑っている姿はよく他人からは不気味と言われることがある

が、彼女はそういう色眼鏡もなく私の素の心を見てくれる心優しい人だ。

純朴で、初雪のように清らかな心の持ち主。そんな彼女を見ているといつも心が安らぐ。そして同時に——暗い欲望が首をもたげる。

私が胸に抱くどす黒い欲望を彼女に叩きつけた時、彼女はどんな顔を、声を、感情を見せてくれるのだろうか。

泣くのだろうか。怒るのだろうか。恐怖？ 嫌悪に歪むのか。軽蔑するかもしれません。この、ユキノさんが。

純白のキャンバスをペンキをぶちまけ徹底的に汚したい、そんな私の下卑た妄想。

しかし、それに私は蓋をする。

欲は欲。理性で覆う術を持つから、私たちは獣ではなくヒトなのだ。

私が獣になるのは芝の上でのみ。己を解き放つことが許される場所。

でも、心で何を思うかは自由ですよ。表に出さない限りは、それが誰に迷惑をかけるわけでもないのだから。

内心の自由を自分に保証し、彼女をそんな欲望のはけ口に行っている素振りはおくびにも出さず、ユキノさんに微笑みかける。

「ただいま帰りました。ユキノさん。……今日は、トレーナーさんと買い物に街へ行っていたんです。これは寄った喫茶店で買ってきたユキノさんへのお土産です。コーヒーを淹れますので、おやつと一緒に食べましょう?」

「うんわあ〜! オシャレなスイーツです! こげなもんもらっちゃまっていいんですか、カフェさん!」

喫茶店で買ってきたお茶請けの菓子に目を光らせるユキノさん。本当に、可愛らしい方。

「もちろん。ユキノさんのために買ってきたものですから」

「ありがとがんです！ それにしてもトレーナーさんと二人でお出かけして、お買い物して、喫茶店なんて、まるで、で、デートみたいですねえ。シチー派だべ、カフェさん……憧れちまうなあ」

「デート……デート……ふふ、ふふふふ」

デート。そう、今日のお出かけは、私とトレーナーさんの、まごうことのないデートだった。

トレーナーさんは意識していないだろうが、少なくとも私と二人で出かけることに忌避感もなく、あれだけ心を開いて楽しんでくれた。感触は悪くないはず。

少し強引だったかもしれないが、次の予定も決められた。二人で撮ったプリクラと合わせてこれ以上のない戦果でしょう。

「ユキノさん……よければ今日のこと、聞いてくださいますか？ このお菓子を食べながら」

「ええ、もちろん！ カフェさんのお話なら、何でも聞かせてください！ そうだ、アタシも今日の事で聞いてほしいことがあるんです。シチーさんと話してたことで、よければカフェさんの意見も聞きてえんですけども……」

「喜んで聞かせてもらいます……では、今コーヒーを淹れますから、お菓子をお皿に出してくれますか？」

「了解ですー！」

優しく、素敵なルームメイトと、コーヒーとお菓子を楽しみながら歓談するこの時間。

私の求める激しい快樂はないが、穏やかに包み込まれるひと時も大切なものだ。

夜はまだまだ長い。

素敵な一日を最後まで素敵にするために、今はこの時を愉しみますよう。

第12話 聖蹄祭、あるいは霸王のオペレッタ

『秋のファン大感謝祭』——普段は関係者以外立ち入り禁止のトレセン学園を一般開放して行われる一大イベントだ。

正式名称を『聖蹄祭』といい、一般の中学高校で言うところの文化祭に該当する立ち位置にあるが、その規模は日本最大のウマ娘養成機関というだけあって凄まじい。

秋のG I戦線が始まる少し前に行われることから、トウインクル・シリーズに臨むウマ娘たちが春から夏にかけての己の走りを見つめなおし、心新たにするための区切りのイベント、リフレッシュするための休息とも位置付けられている。

そしてファンたちは、普段はテレビや客席からでしか見ることのないレースウマ娘たちと間近で触れ合う機会を求めやってくる。

普段自分たちを応援し、支えてくれてるファンたちの姿を見ることで、ウマ娘たちもまた自分のレースに向ける思いを一層強くするわけだ。

あるウマ娘はもてなす側として模擬店や催しを営み、あるウマ娘はイベントの準備に奔走し、あるウマ娘は純粹にファンに混ざって一人の客として楽しむ。

思い思いの姿勢で、ウマ娘たちはこのイベントの空気を満喫する。

なぜ急にそんな話をするかという点、今日はその『聖蹄祭』当日だからである。

◇

「トレーナーさん、お待たせしました」

「お疲れ様、マンハッタンカフェ」

今年デビューしたジュニアクラスウマ娘たちが一堂に会して秋から来年のクラシックに向けての意気込みを語るイベントに出席していたマンハッタンカフェが、出番を終えて駆け寄ってきた。

俺も客席から見ていたが堂々とした振る舞いで注目を集めていたと思う。今は脚の不調でトレーニングのみでレースに参加する予定はないが、来年のクラシックには間に合うこと。クラシック三冠路線に挑むといった、事前の打ち合わせ通りの内容を語ってファンを喜ばせていた。

他にも、サスケハナ、アニマルポツケ、フレイムダーツといったこの世代のクラシック路線を引っ張ると目されているウマ娘や、テイアラ路線を標榜するテイエムマリンなど、今後のマンハッタンカフェのライバルになりうるウマ娘を見るという意味で俺にとつても意義のある時間だった。

なお、アグネスタキオンは不在。マンハッタンカフェに聞いたところによると「そんな非生産的な些事に費やす時間があつたら実験をさせてもらうよ」とのこと。マイペースな彼女らしい。

マンハッタンカフェのクラスは有志が各々出し物をやっているらしいが、マンハッタンカフェは今回は特に企画をしなかったとのことなので、これで彼女の仕事はおしまい。後は自由時間となる。

「サスケハナやアニマルポツケは？ あの子たちと一緒に回ってきたらどうだ」

「……いえ、あの人たちはこの後他の方のお手伝いや応援に行かれるそうなので。トレーナーさん、私と回ってくれますか？」

「そうか。それは残念だな。わかった、それじゃ一緒に行くかうか」

普段の賑やかさとはまた違う明るい喧騒に包まれた学園の中を二人で歩く。石畳の道は屋台が立ち並び、練習コースは子供たちがウマ娘と駆け回っている。広いトレセン学園がお祭りムード一色だ。

何というか、自分も学生に戻ったみたいで楽しいなあ。

マンハッタンカフェは楽しんでるのかなと思って目を横にやると、なぜか俺の顔を見つめていた彼女と目が合った。

「……俺の顔、何かついてる？」

さつき屋台で買って食べた焼きにんじんの欠片でもついていたのかなと口元を拭ってみる。

「いえ、何もついてませんよ。ただ見てただけですので、お気になさ

らず」

「流石に気になるかなあ……」

目線を逸らさない彼女を見続けるのが何やら気恥ずかしくなって、手元のパンフレットに視線を落とす。

「ま、マンハッタンカフェはどこか行きたいところとかあるのか？」

「そうですね……騒がしいところよりは落ち着いたところがいいので、イベントよりは展覽系へ行ってみたいです。……ああ、それと」

一つ、ここには行ってみたいです。

そう言いながらマンハッタンカフェが、パンフレット地図のいか所を指差す。そこは体育館。時間制で音楽だったり劇だったり、色々な催しを持ち回りで行う会場だ。

今の時間帯だとしてやる予定の催しは……

『『テイエム歌劇団 愛と憎しみの狂騒劇く生まれながらの霸王であるボクが世紀末霸王となって世界を席卷する栄光のテイエムオペラ王国興亡叙事詩風雲編』……？ 落ち着いたところ……？』

清々しいまでの自己主張タイトルがすでに騒がしい。タイトルだけであらずじを語りつくす勢いだ。

「いえ、ここは間違いなく落ち着いたところではないと思います。ですが、この名前に見覚えはありませんか、トレーナーさん」

キャスト欄へと紙面をマンハッタンカフェの指がつつ、となぞる。

『企画・テイエムオペラオー』

『監督・テイエムオペラオー』

『脚本・テイエムオペラオー』

『構成・テイエムオペラオー』

『演技指導・テイエムオペラオー』

『振付・テイエムオペラオー』

『配給・テイエムオペラオー』

『主演・テイエムオペラオー』

『助演・テイエムオペラオー』

『エキストラ・テイエムオペラオー』

『ナレーター・テイエムオペラオー』

『愉快的仲間たち・アドマイヤベガ、ナリタハイウエイ、メイショウドトウ（五十音順）』

『主題歌（作詞・作曲・編曲） テイエムオペラオー』

『劇中歌（作詞・作曲・編曲） テイエムオペラオー』

『音響・照明・大道具・小道具・衣装・雑用・etc・トレーナー君』

眩暈がするほどの名前の圧にクラクラする。聖蹄祭の演劇をどこに配給するんだとか、最後の最後に担当トレーナーに丸投げしているとか色々言いたいことはある。

しかし、それを差し置いてもこの名前のインパクトはそれに勝るものだ。インパクトの意味は違うが。

『テイエムオペラオー』

今、トウインクル・シリーズの本命であるクラシックレースすら差し置いてファンたちの視線を一身に受けるシニア級ウマ娘。

今年初春のGⅡレース・京都記念を皮切りに、GⅠ含む重賞レースを破竹の4連勝。ファンの人気投票で出走が決まるグランプリレース・宝塚記念にも堂々の一番人気で選出され、期待に応え見事1着をとって見せたスターウマ娘だ。

今度行われる京都大賞典、次いでその後の天皇賞秋にも既に出走表明をしており、連勝記録をどこまで伸ばすのか、いくつGⅠタイトルを獲得するのかが連日ファンたちの間で盛り上がりを見せている。

そして、もしドリームトロフィー・シリーズへの移籍をしないのであれば、来年にはマンハッタンカフェの前に立ちはだかることとなるであろう大きな壁だ。

「演劇というのも興味はありますが……純粋に、トウインクル・シリーズの強者を観察したいと思ひまして」

鋭く細められたマンハッタンカフェの視線が、イベント紹介ページになぜかドアップで高笑いする自撮り写真を掲載しているテイエム

オペラオーを射抜く。

強いウマ娘と戦いたい。

マンハッタンカフェのレースにかける思いに今最も近い存在は、間違いなくテイエムオペラオーだろう。

俺も、レース以外の場で対戦相手を見たいという彼女の気持ちに異論はない。

「わかった。それじゃあ、体育館に行ってみよう」

◇

「な、なんだってー!」

体育館前まで差し掛かったところで、そんな声が聞こえてきた。何事かと、マンハッタンカフェと二人で声の元を探す。

「アヤベさん、来られないとはどういうことだい!」

派手な衣装のウマ娘が、スピーカーモードのスマホへ焦りながら通話をしている。

『ごめん、迷子の子供に泣きつかれて……お母さんを探してあげないと……あつ、泣かないで。大丈夫よ、私が貴女のお母さんを見つけてあげる。……ほんと、ごめんなさい。できる限り早く駆け付けるつもり、ではあるけれど……それじゃあ』

「アヤベさん!? アヤベさーん! ああつ、何ということだつ!

晴れの舞台を目前に襲い来る苦難つ! 神はボクにこの壁を乗り越えろてみせろというのか!」

「うう……どうしましょうくオペラオーさん……」

「困りましたね。アヤベさんの代役、今から探します?」

派手なウマ娘には見覚えがある。というか、さつき写真で見た。テイエムオペラオーだ。

その周りで心配そうな顔をしているのは、メイショウドトウとナリタハイウエイだろう。いずれもテイエムオペラオーと鎬を削るシニア級の実力者だ。

どうやら、何か劇の前にアクシデントがあったらしい。

心配になって声をかけてみることにする。

「ちよつといいかな？ 何かトラブルでもあったか？」

三人が怪訝そうな目で俺を見て、俺のスーツについたトレーナーバッジと、隣のマンハッタンカフェの姿を見て警戒を解いた。

「学園のトレーナー君か。トラブル……そう、これはボクに与えられた試練！」

自分の世界にトリップするティエムオペラオーを横に押しやったのは、長身でウマ娘の中でも一際目を引く端正な顔立ちの栗毛のウマ娘、ナリタハイウェイ。昨年の菊花賞ウマ娘だ。

「どうも、トレーナーさん。それに、カフェさん。実は、私たちの劇の出演者が一人、時間までにこちらに來れそうにないんです」

「もうすぐ開演なのに……救いはないんですか？」

なるほど。それは確かに一大事だ。開演時刻まで15分もない。後ろにも演目はある以上、引き伸ばすのも難しいだろう。

「來れない人の代わりを、君たちがやるのは難しいのか？」

「ドトウはかつてはボクの忠臣でありながらボクの王国の転覆を目論見、出奔した敵国の騎士。ハイウェイ君はボクの妻でありながら王座を狙いボクの毒殺を目論む美しき毒婦役だ。そんな二人に、ボクの命を虎視眈々と狙う貧民街生まれの暗殺者であるアヤベさんの代役までやらせるわけにはいかないだろう。観客が混乱してしまうからね」

「いや、出てくる演者全員君の敵なのか!? どんな劇なんだ……」

「繁栄の絶頂を極める王国は常に内患外憂の危険に晒されるものさ！ ああつ、ティエムオペラオーによるティエムオペラオーのためのティエムオペラオー劇場を心待ちにするファンたちが大勢押し寄せているのに、なんたる醜態！ 建国史を語る前に亡国してしまっただ！」

大げさな身振り手振りで感情を表現するティエムオペラオー。まあ、彼女なりに焦ってはいるんだろう。

「ふう、どこかにいないものですかね。アヤベさんの代役をやつて

くれそうな方」

「そんな人、いるんでしょうか……それに台詞と動きは、ど
んくさい私だと覚えるの、とっても大変で……」

「諦めるな！ ハイウェイ君！ ドトウ！ 探せばいるはずさ！

短時間で台詞を覚えられて、人前で堂々と演技ができて、ボクの輝く
覇気に目をくらませることのない、これからの予定が空いてる、そん
な天より遣わされたウマ娘が！」

「演技ができて……」

「予定が空いてそうなウマ娘……」

テイエムオペラオーの言葉に視線をさ迷わせたメイシヨウドトウ
とナリタハイウェイ。その二者の視線が一点で交わった。

「いたね」

「いました〜！」

「……私、ですか？」

◇

「あーっはっはっは！ 予定の空いている女優の君が、偶然あの場
所へ通りかかるなんて、これは天の配剤というほかない！ いや、は
たまた甘美な悪魔の契約?! 何にせよ、感謝するよカフェさん！ ボ
クの華麗なるテイエムオペラオー自伝を記す際には、君の貢献は見開
き数ページで粹をとって語りつくそうじゃあないか！」

「いえ、遠慮します……」

体育館の舞台袖で台本を読み込んだマンハッタンカフェは、動きの
流れを二三質問して、大丈夫そうだと頷いた。

「舞台は門外漢なんですけれどね……ですが、今日は興行で
はなくただの学園のお祭りですし、声を張って動きさえ大きくすれば
問題はないでしょう」

ボロボロの外套風の衣装を羽織ったマンハッタンカフェが、小道具
のナイフをクルクルと指で回す。本番前なのに既に風格が凄い。

「これは、プロのカフェさんは逆に演技が上手すぎて主役のオペラ

オーを食ってしまうのでは？ 大丈夫ですか、オペラオー。オペラ王国クーデター、普通に成功しそうですよ」

「何を言うんだいハイウェイ君！ 光り輝くこのテイエムオペラオーは周囲全てをまばゆい光で照らす太陽のよう！ そう、影が濃ければより光は際立つのさ！」

「凄い自信……ダメダメな私ですけど、脚を引っ張らないように頑張らなくちゃ……」

ブー！

開演のブザーが鳴る。

俺にできることは何もないが、舞台袖から成功を祈ろう。

「さあつ、行くぞ皆の者！ 高らかに衆目を魅せようじゃあないか！」

◇

劇は順調に進む。

テイエムオペラオーの創り出す独特の世界観、空気感は既にファンたちを取り込んでいるかのようで、テイエムオペラオーの一挙手一投足に観客が湧きたつ。

「ああ、我が友ドトウ！ ボクを守ると騎士の誓いをしたその剣で、君はボクの命を散らそうというのか！」

「うう……お、オペラオーさん……こ、これが私の、オペラオーさんへの友情の証なんですう！ お命頂戴させてくださいーい！」

「グフツ、ハイウェイ君……なぜ君が……」

「フフフツ、これで至高の玉座は私のモノ……愛していただきませうオペラオー……憎らしいくらいにね」

迫りくる脅威を乗り越え、悲しみを振り払いテイエムオペラオーは征く。永久の楽土、テイエムオペラ王国を守るために。

しかし絶頂を極めたテイエムオペラオーがテイエムオペラ王国の永遠の繁栄を宣言する式典を開催したその時、彼女に近づく影が！

「はーっはっはっは！ 民よ、テイエムオペラ王国は永遠だ！ さ

あ、我が名を讃えよ！ 諸君らの頭上に君臨する霸王の御名を！」

オペラオー！ オペラオー！ テイエムオペラオー！

「はーっはっはっは！ っ！」

キーン

小道具のナイフがぶつかる瞬間に効果音が流れる。

舞台袖から飛び出してきたマンハッタンカフェが突き出したナイフと、テイエムオペラオーの杖が交差した音だ。

「何奴！」

「霸王の治世是一片の希望も見えない暗黒の世界……その軀で貴方が踏みつぶしてきた全てに詫びなさい……！」

「勇者を気取る痴れ者の暗殺者か！ 面白い、君も我がテイエムオペラ王国の歴史の1ページにしてあげよう！」

キーン、キーン

臨場感溢れる剣戟に、劇だとわかっていても息を呑む。

そして、ついに物語はクライマックス。

追い詰められたマンハッタンカフェが罫を発動させ、一転テイエムオペラオーを窮地に追いやる。

「くっ、このボクがここまで追いつめられるとは！」

「はあ、はあ……何という強さ……ですが、これで終わりです。霸王テイエムオペラオー、時代の波に消えなさい……！」

「時代とはボク！ 波とはボク！ つまり時代の波とはこのボクのことさー！」

武器を構えた二人が交錯するその瞬間、照明が消え暗転。そして暗闇の中でザシユツ、バタツとどちらかが凶刃に倒れる音がする。

『ああ、テイエムオペラオー！ 頑張れボク！ 負けるなテイエムオペラオー！ 覇王の千年王国のために！ ボク、テイエムオペラオーの運命やいかに！ この続きは、君たちがターフの上でその目に焼き付けたまえ、あーっはっはっは！』

最後に舞台に立っていたのは果たしてどちらなのか。

テイエムオペラオー主役の舞台だとわかっていても、俺はマンハッタンカフェの勝利を願った。

◇

「感謝するよカフェさん！ ボクのオペレッタは大成功だ！ お礼に君をテイエムオペラ王国の名誉国民にしてあげよう！」

「いえ、結構です」

「むう、歓喜にむせび泣くところだぞここは」

袖にされたテイエムオペラオーを置いて、マンハッタンカフェがこちらへ歩いてくる。

「お疲れ様、マンハッタンカフェ。かつこよかったよ」

「ありがとうございます。トレーナーさん」

マンハッタンカフェにペットボトルを渡して労う。

「ありがとう、カフェさん。ご迷惑おかけしました」

ペコーリと頭を下げるのはマンハッタンカフェが代役を務めた本来のキャストであるアドマイヤバガ。今はケガで療養中だがダービーウマ娘の栄光を勝ち取ったウマ娘だ。

「私こそ、貴女の役を取ってしまって申し訳ありません」

「いえ、それは、全く、全然惜しくないのです。それを含めてありがとうございます」

きつぱりと言い切るアドマイヤバガ。後ろで「アヤベさーん!?」とテイエムオペラオーがショックを受けている。

「それでは、私はこれからトレーナーさんと会場を回るのに戻ります。お疲れ様でした」

「ああ、カフェさん！ ボクの王国民になりたければいつでも言っ

てくれていいからね！ きつと君も、ボクの秋のレースを見れば気が変わるだろう、あーっはっはっは！ 京都大賞典！ 天皇賞秋！ ジャパンカップ！ そして有馬記念！ 君は栄光の覇道の目撃者になるだろう！」

「ちよつと、オペラオー。大言壮語は結構ですが、私たちもいるんですよ。後塵を拝しましたが、秋のレースは貴女に譲るつもりはありません。ね、ドトウ」

「わ、私ですか！？ 私なんかが、そんな大それたことは……どうしましょう」

「……私だって、怪我が治りさえすれば……くっ」
霸王テイエムオペラオーとそれを追い落とそうとする挑戦者たち。彼女たちにもまた物語があり、ドラマがある。

今日の舞台のようにその道がマンハッタンカフェと交わる時は、まだ先の話だ。



『さあ、テイエムが！ テイエムが！ テイエムオペラオーが抜け出している！ 一番人気のジンクスが何のその！ 霸王は天皇賞の魔物すら飲み込んだ！ テイエムオペラオーが一着でゴールイン！ そして二着はメイショウドトウ！ 三番人気ナリタハイウェイは五着に敗れました！ 圧倒的！ 天皇賞春秋連覇！ 重賞6連勝！ 4つ目のG Iの栄光を掴んだテイエムオペラオー！ 彼女の伝説はどこまで続くのかー!!』

大きく息を吐きだすメイショウドトウ、膝から崩れ落ちたナリタハイウェイを見下ろすように、霸王は秋のG Iでも高らかに歌った。

「……驚愕ヤベエな。来年には、これと競争ヤリアウことになんのかアタシら」

長い沈黙の末、ようやくアニマルポッケが一言、ポツリと口に出す。今はジュニア級の自分たちと、シニア級で連勝を重ねるテイエムオペラオー。その差はいかほどか。

「テイエムオペラオー君か……とんでもない怪物がいたものだ。だが、彼女の走りは、ウマ娘の限界のその先とはなんというか異質に思えるねえ。強さと限界は別の道の先にあるということか……? いや、しかし私が求めるものは速さの限界の先。それならレースにとっては強さとは速さではないのか……?」
ふむ

「Overlord……今ノチャンピオンハ、トンデモナイモンスター、デスネ」

「テイエムオペラオーさん……」

霸王の首を狙うものは数知れず。しかし、未だその刃は彼女に一矢報いることすら叶わない。

マンハッタンカフェは手の中に以前劇で握った小道具のナイフの感触を思い出す。

あの時は小道具で、劇の結末はぼかされていた。

願わくば、この手で……あの再演を……結末は当然……。

「ふふ……ふふふ……」

「うわっ、『根暗』^{キツ}気色悪^メエ！ 何ニヤニヤしてやがんだ」

「何でもありませんよ、ふふふ……」